

戦間期ウィーンのユダヤ人社会

野村（中沢）真理

目次

序. 1918年主席ラビ・ハイェス登場

1. 世紀末ウィーンのユダヤ人社会

- (1) 闘うラビ・ブロッホ
- (2) オーストリア神話と反ユダヤ主義のはざま
- (3) シオニズムという妖怪

(以上、本号)

2. 戦間期ウィーンのユダヤ人社会

- (1) シオニストの台頭
- (2) ゲマインデの民主化闘争
- (3) ユダヤ民族主義の両刃の剣
- (4) ユダヤ人社会の分裂

3. 放浪のユダヤ人

- (1) 放浪のユダヤ人
- (2) ユダヤ人社会の貧困化

4. ホロコースト前夜

序. 1918年主席ラビ・ハイェス登場

1918年10月2日、謁見は15分ほどで終わった。新任の主席ラビ、ヒルシュ・ペーレッツ・ハイェスは、自分が「ユダヤ人の代表者」として招かれたことに感謝し、皇帝カール1世もまた、ハイェスに満足の意を返す。皇帝はハイェスに別れの握手の手をさしのべた。

われらの主席ラビはシオニストか！

ウィーンのユダヤ教徒のゲマインデ⁽¹⁾から磊々たるハイェス非難の声があがったのは、複数の新聞紙上で謁見の詳細が発表された直後のことである。

皇帝とハイエスのやりとりは、どのようなものであったのか⁽²⁾。

1917年11月のバルフォア宣言をふまえて皇帝は問う。

「協商国が設立しようとしているユダヤ人国家について、どのように考えているのか。」

ハイエス「ユダヤ人国家設立の可能性について、私としましては、いかなる判断も申し上げかねます。シオニズム運動は唯一の国際的な運動でありまして、戦争中もそのようなものとして継続され、またそのようなものとして厳格な中立を守って参りました。[以下、引用略]」

シオニズム運動は政治的には中立であり、協商国の傀儡国家を設立しようとしているのではない、と弁明するハイエスに対し、皇帝は重ねて問う。

「ユダヤ人にとってパレスティナは、そもそもいかなる意味を持つのか。」

ハイエス「ユダヤ民族は、大小何千もの集団に分散させられ、そのそれぞれが、自分たちの存在のために闘わねばなりません。これらの集団が今日まで存続しえたのは、奇跡によるとしか言いようがありません。[引用、中略]しかし民族は、みずからの存在を奇跡の上に築くことはできません。われわれは、世界中のユダヤ人をまとめる民族的にして宗教的な中心というものを持たねばならないのです。」

皇帝「そしてそれはパレスティナでしかありえないのか。」

ハイエス「仰せのとおりでございますとも！パレスティナはわれわれの発祥の地であり、われわれは数千年来パレスティナに愛と憧憬の念を抱き続けているのです。」

このやりとりから、ハイエスがシオニズムの共鳴者であることは明らかだが、何でもない時であれば、ハイエスの発言はそれほど物議を醸しはしなかったであろう。皇帝が、「それではパレスティナは、すべてのユダヤ人を受け入れることができるのか」と問うたのに対してハイエスは、ユダヤ人の郷土が再建されたとしても、それが世界中のユダヤ人を受け入れられるわけではないと応える。パレスティナにおけるユダヤ人の郷土とディアスポラ⁽³⁾の並存は、ハイエスの基本的な考え方であった。そしてハイエスは、オーストリアに住むユダヤ人はオーストリアと皇室に比類なき愛をよせており、祖国オーストリアと皇室のために力をつくすと誓ったのである。謁見の間を退出

するさいの「ユダヤ人の代表者」という表現にしても、新聞報道を信頼するなら、ハイェスは不定冠詞つきで、みずからをユダヤ人の代表者の1人と名のつたのであった。

だが時期が時期であった。

第1次世界大戦も末期に近づくにおよび、皇帝カール1世は、崩壊寸前のハプスブルク帝国を民族の連邦国家として再編する構想をかためた。この構想自体は、予想外に長びく戦争さなかの1916年に老皇帝フランツ・ヨーゼフが崩御し、カール1世がその跡を継いだ頃から浮上していたものである。オーストリアのシオニストたちはすでに早くからこの動きをとらえ、ユダヤ人にも帝国の他の諸民族と同等の民族的権利を要求すべく運動を開始していた⁽⁴⁾。彼らの側ではハイェスの謁見は、皇帝がいよいよ民族連邦構想を公表するに先立ち、ユダヤ人の意向を質したものと見なされた。そしてシオニストは、ハイェスが皇帝の前でユダヤ人は民族であると明言したことを歓迎し、皇帝もまたそれに理解を示したものと受けとめたのである。シオニスト系のある新聞では、謁見の詳細を報じるのと同じ紙面で、きたる10月14日に開催予定の、ユダヤ人に対して民族的同権を要求する集会への参加が呼びかけられる⁽⁵⁾。

このなりゆきに驚いたのが、シオニストのユダヤ民族主義に反対するユダヤ人たちである。ゲマインデ理事のハインリヒ・シュライバーは10月5日付でゲマインデに抗議文を提出し、ゲマインデ理事会の召集を要請した。

「私は、もはやわが目を信じるできません。私は目覚めているのでしょうか。それともこれは悪い夢なのでしょう。」

〔ゲマインデ〕会長がシオニスト、

主席ラビがシオニスト。

皇帝は無資格で無責任な者たちから誤った情報を与えられたのです。

手短かに申せば、言われたことはすべて、〔ゲマインデの〕既定の綱領にも信念にも反しています。

もはやこれ以上、理事会およびゲマインデ構成員の意志を無視するようなことが行われてはなりません⁽⁶⁾。」

60人近くの署名を集めた別の抗議文は、謁見でハイェスが自分の個人的な

見解を「ユダヤ人全員の名において」述べたことに怒りと不快感をあらわにする。ハイェスの分を越えた発言のために、皇室でも、世間一般においても、「ウィーンおよびオーストリアの全ユダヤ人がシオニストであり、シオニストの目的や目標に完全に同意しているかのような」誤解を生みかねない。署名者たちは誰に対しても、皇帝の面前で、「われわれの感情を深く傷つけるような言明をわれらの名とわれらの同意において公にする権利」を与えた覚えはなかった。「この恐ろしく深刻で困難な現時点において、われわれ各人の第一にして唯一の義務は、その思想と感情のすべてを国家に、祖国に向けることであり、ユートピアにかかわりあうべきではない。そのユートピアは、個人的な運動のために役立つべきものであり、けっしてユダヤ人全体がそれを信じているわけではない⁽⁷⁾。」

しかし謁見でハイェスが述べたことは、彼がこれまでも主張してきたことである。それゆえハイェス自身は、このような抗議を予測していなかったのではないか。いずれにせよ彼のとった態度は明確であった。すなわち彼はいっさいの抗議を無視し、シオニストとして行動することをやめなかったのである。ハイェスはその積極的な政治的発言において、これまでの主席ラビとはまったく違っていた。誰もハイェスの行動を押し止めることはできなかった。

ゲマインデの理事たちから起こったハイェス非難も、今さらといえば、今さらである。ハイェスがいかなる思想と経歴の持ち主であるかは、1918年4月に彼が高齢の主席ラビ、モーリツ・ギューデマンの後継者となることが決まった時、ゲマインデの主だった人々はすでに知っていたはずだからだ。ハイェスは大学時代からシオニストとしての活動歴を持ち、1914年のはじめにはパレスティナに旅行もしている⁽⁸⁾。ハイェスの採用に関して、反シオニストのユダヤ人から反対意見が出なかった方が不思議なのである。

ハイェス採用の可否を議論する1918年4月23日のゲマインデの代議員会では、最初にゲマインデの会長アルフレート・シュターンがハイェスを紹介した後、ハイェス自身によって自己紹介と主席ラビの職に就くにあたっての方針説明が行われた。ハイェスが退席した後、現主席ラビであるギューデマンがハイェス推薦の言葉を述べ、その後シュターンが出席者から自由な発言を

求めたが、そのさい賛成以外の意見は聞かれなかった。そして翌4月24日の理事会本会議での票決で、出席者26人のうち、可が20、否が6でハイエスの採用が決定されたのである⁽⁹⁾。

あるいは人々は、ハイエスも主席ラビになれば口を慎むであろうと期待したのかもしれない。そうだとすれば、人々はハイエスを甘く見たのである。ハイエスの伝記を著したローゼンフェルトはいう。

「たしかに人々はハイエスがシオニストであることを知っていたが、こう期待していた。自由主義者の皇太子が帝位につくと、自分の自由主義をがらくた部屋に投げ捨ててしまうように、ハイエスもまた主席ラビになれば、主導権を握る力のないシオニズムを退けるくらいの分別は持っているのではないかと。この期待が実現されなかった時、人々はまさしくハイエスによって裏切られたかのように振る舞ったのだ。ある人々はハイエスに対して、ラビたるものは、加えてこのように大規模なゲマインデのラビたるものは、党派を超越しているべきであり、特定の「党派」に肩入れしてはならないと教えようとした。他の、あまり繊細とはいえない気性の持ち主たちは、自分に食いつけてくれる者にあわせた歌を歌うべきだ、とわからせようとした⁽¹⁰⁾。」

ハイエス登場は、ウィーンのユダヤ教徒のゲマインデの歴史において画期をなす事件となる。なぜなら第2章で詳述するように、ハイエスによって道徳的な拠り所を得たシオニストは、ゲマインデ内で戦前からの優位を死守しようとする反シオニストを相手に、ゲマインデの主導権掌握をめざして熾烈な闘争の幕を切り、最終的にゲマインデを制したからである。

この闘争において支配権を譲らなければならなかったのが、「オーストリア・イスラエル同盟⁽¹¹⁾」のユダヤ人たちである。しかし振り返ればこの「同盟」を創設したラビ、ヨーゼフ・ザームエル・ブロッホも、かつては眠れるウィーンのユダヤ人社会の革新者として登場した。いやブロッホ登場に対するウィーンのユダヤ人エスタブリッシュメントの驚愕と反発は、ハイエスの比ではない。ウィーンのユダヤ人にとってブロッホは、ガリツィアから出てきた妖怪であった。ハイエスもガリツィアの出身である。そしてすでに別稿で論じたように、ブロッホの時代からハイエスの時代へと、ウィーンの

ユダヤ人社会を大きく変貌させたのもまたガリツィアのユダヤ人であった⁽¹²⁾。

話はひとまず世紀末のウィーンへもどる。

- (1) ゲマインデの構成について、詳しくは第2章の第2節で述べる。正式な団体名は Israelitische Kultusgemeinde Wienで、ウィーンでイスラエルの民の宗教を信仰する人々によって構成された共同体を意味する。当時、しばしば差別的にも使用されたJude (ユダヤ人) にかえて、Israelit (イスラエル人) という呼称もさかんに用いられ、ユダヤ教は、イスラエルの民の宗教といわれる。しかしイスラエルという国家が存在する現在、イスラエル人という呼称は混乱を招く恐れがあるため、筆者はこれまで「ユダヤ人ゲマインデ」あるいは「ユダヤ教徒のゲマインデ」という呼称を用いてきた。本稿では、ユダヤ人を民族とみなすシオニストの構想する「ユダヤ民族のゲマインデ」や「民族ゲマインデ」との区別を明確にするため、「ユダヤ人ゲマインデ」という呼称を避け、「ユダヤ教徒のゲマインデ」あるいは「信徒ゲマインデ」という呼称を用いる。ただし誤解のないかぎり、ゲマインデとのみ表記する。
- (2) Central Zionist Archives, Jerusalem (以下CZと略記), A30/25. [] 内は引用者による補足。以下、同様。
- (3) ギリシア語で「離散」の意。ユダヤ民族の発祥の地パレスティナの外にあるユダヤ社会をいう。ディアスポラ民族主義がユダヤ人のパレスティナへの帰還を必ずしも前提せず、離散地でユダヤ人の民族的権利の獲得をめざすのに対し、ユダヤ人の離散状態がヘブライ語で「ガルート (追放)」と表現される時、それは否定的な意味をおびる。
- (4) 第1章第3節および第2章以下で明らかにするように、シオニスト陣営は、現在の居住国の内政といかに、どこまでかわるかについて、さまざまな見解にわかれ、無関与を主張するグループも存在した。オーストリアのシオニストについていえば、シオニスト組織の発足当時から国内政策重視派が多数を占める。オーストリアの内政に積極的に関与し、ユダヤ人の民族的権利の獲得をめざそうとする彼らは Jüdischenationale (ユダヤ民族派) と呼ばれることが多く、また新聞その他では「シオニストやユダヤ民族派」といった並記もよく見られる。彼らがたんにシオニストではなく、みずからもユダヤ民族派と称したことには、彼らの敵対者のシオニズム理解も関係していると考えられる。本稿の「序」でも登場したゲマインデの会長シュターンのシオニズム理解 (詳しくは第2章第1節で述べる) に典型的なように、ウィーンのいわゆる同化ユダヤ人が嫌ったのは、ユダヤ人のパレスティナ移民運動 (彼らの理解するシオニズム) ではなく、シオニストの現在の居住国での民族主義的主張であったからである。自分たちは、必ずしも反シオニズムではないが、反ユダヤ民族主義だ、というのである。戦間期ウィーンのゲマインデで繰り広げられたのは、

この意味でユダヤ民族派と反ユダヤ民族派の主導権争いであり、これまでの拙稿で筆者がこの主導権争いをとりあげたさい、「シオニスト」という呼称よりは「ユダヤ民族派」という呼称を使用してきたゆえんである。しかしそれでは、ユダヤ民族派があくまでもシオニストであることが見えにくくなるとの批判がよせられた。本稿ではこの点に十分に留意したい。

- (5) Central Archives for the History of the Jewish People, Jerusalem (以下CAと略記), A/W 725-4, *Die jüdische Gemeinschaft und Oesterr.-ungar. Gemeinde-Zeitung*, 1. Jg., Nr. 15/16, Wien 3-6. Okt. 1918. 皇帝による公表は1918年10月16日に行われた。10月14日の集会については第2章第1節で述べる。
- (6) CA, A/W 725-4.
- (7) CA, A/W 725-4.
- (8) Moritz Rosenfeld, *Oberrabbiner Hirsch Perez Chajes. Sein Leben und Werk*, Wien 1933, S. 81f.
- (9) CA, A/W 725-2. ハイエスは1918年8月3日、ウィーンの前ラビに就任した。なお理事および代議員の選出については、第2章第2節を見よ。
- (10) Rosenfeld, a. a. O., S. 82.
- (11) 第1次世界大戦後に「ドイツオーストリア・ユダヤ人同盟」と改称された後、再び1931年に「オーストリア・ユダヤ人同盟」と改称された。以下では、混乱のないかぎり「同盟」という略記も用いる。
- (12) 第1次世界大戦中のガリツィアからのユダヤ人戦争難民のウィーン流入は、ウィーンのユダヤ人社会の相貌を大きく変えることになった。本稿の第2章以下は、ウィーンのユダヤ人社会のこの変化を既知の背景としている。ガリツィアからのユダヤ人難民が引き起こした諸問題については、本稿の第2章第3節の冒頭でごく簡単にふれたが、詳しくは下記の拙稿で論じた。「第1次世界大戦期オーストリアの戦争難民問題」『金沢大学経済学部論集』第15巻第1, 2号(1994/1995年), 「戦間期オーストリアの反ユダヤ主義1918-1925」『金沢大学経済学部論集』第16巻第1号(1995年), 「第1次世界大戦後オーストリアにおけるガリツィア・ユダヤ人の国籍問題」『金沢大学経済学部論集』第16巻第2号(1996年)。また第1次世界大戦以前の世紀末ウィーンのユダヤ人社会の構成については、拙稿「『ハブスブルク神話』と世紀末ウィーンのユダヤ人」『金沢大学経済学部論集』第12巻第2号(1992年)がある。

1. 世紀末ウィーンのユダヤ人社会

(1) 闘うラビ・ブロッホ

1882年4月1日、ハンガリーの人口約2700人の町ティサエスラールから14才のキリスト教徒の少女が姿を消した。町にユダヤ人による儀式殺人⁽¹⁾の

噂が広がる中で、同じく14才のユダヤ少年が、自分の父親が数名のユダヤ人の助けを得て、シナゴークで少女を殺すところを目撃したと証言、ハンガリー各地でユダヤ人に対する報復的暴力行為が発生する。少年の証言にもとづき1883年6月19日、15人のユダヤ人が殺人および殺人幫助の罪で起訴された。

ユダヤ教徒に中世さながら儀式殺人の罪が着せられたことに対し、国際的な非難がわき起こったが、他方でこの時、儀式殺人の存在を学問的に立証する役目をかってでたのが、『タルムード・ユダヤ人』(1871)の著者アウグスト・ローリングであった。『タルムード・ユダヤ人』は、アイゼンメンガーの『暴かれたユダヤ教』(1700)を下敷きとして、タルムードからの勝手な引用とタルムードに関するでたらめな言説を集めた本でしかないのだが、プラハ大学の神学者ローリングはタルムードの権威として、ユダヤ教徒は儀式のためにキリスト教徒の血を必要とすると証言したのである。高名なプロテスタントのオリエント学者フランツ・デーリチュが、この問題に関してローリングの無知を指摘すると、逆にローリングは、デーリチュはユダヤ人ではないかと侮辱する態度に出た。

ここでユダヤ人としてローリングに挑戦状を突きつけたのが、ガリツィア生まれラビ、ブロッホである。ブロッホは1883年7月、ローリングを論駁する一連の文書を発表して彼にタルムードを読む能力がないことを証明し、彼を偽証者と決めつけたのである。プラハ大学教授の肩書きを維持するため、後に引けなくなったローリングは、ブロッホを名誉毀損で告訴する。しかし2年間におよぶ調査の後、1885年に裁判が開始されるわずか13日前になって、ローリングは告訴を取り下げた。勝ち目がなかったからに他ならない。

発端となったティサエスラール事件の方は、少年の目撃証言が故意に誘導されたものであったことが明らかにされ、1883年の裁判で15人全員が無罪となった。そのさい儀式殺人は根拠のない作り話であることが確認された⁽¹⁾。これでローリングは、アカデミーの世界から姿を消す。彼の悪名高い『タルムード・ユダヤ人』は、反ユダヤ主義者のおかげで世に悪名を保ち続けたが。

勝負はブロッホの全面的勝利であった。しかしそれがウィーンのユダヤ人から暖かな歓呼で迎えられたかという点、そうは言い切れない。ブロッホの登場は、すでにウィーンのゲマインデのエスタブリッシュメントたちにとっ

て「おぞましい妖怪 Schreckgespenst⁽³⁾」の登場だったからである。ウィーンでのタルムード論争は、ティサエスルール事件の前から始まっていた。

1882年4月4日のキリスト教徒営業者の集会で、職人のフランツ・ホルベクはユダヤ人によるキリスト教徒支配の脅威を訴えた後、次のように発言した。この集会を率いていたのは、同年6月に「ドイツ民族協会」を旗揚げする反ユダヤ主義者のゲオルク・シェーネラーに他ならない。

「私は君たちを挑発する気はない。だが聞いてくれ、わかってくれ！この本、タルムードだ！この本に何が書いてあるか知っているか？真理だ！それで君たちは、君たちがこの本の中で何と呼ばれているか知っているか？豚ども、犬ども、ロバどもと書かれているんだ⁽⁴⁾。」

ホルベクの反ユダヤ演説は、公の秩序を乱したかどで告訴されるのだが、1882年10月28日の陪審裁判の席上、ホルベクは、彼の犬、豚発言の根拠はローリングの『タルムード・ユダヤ人』の説明であると主張し、彼の弁護人の要請で同書の該当箇所が読みあげられた。ホルベクは無罪放免となる。

これでは世間は、タルムードの中に実際にキリスト教徒を犬豚よばわりする記述があると信じるであろう。ウィーンの前座ラビ、アドルフ・イエリネクと、後にイエリネクの跡を継ぐモーリツ・ギューデマンは、連名で10月30日、タルムードにはそのような記述はなく、『タルムード・ユダヤ人』の説明はまったくの誤りであること、そもそもタルムードにはキリスト教徒を敵視するような記述は含まれていないことを明らかにし、声明としてウィーンの日刊紙すべてに掲載させた。これに対してローリングは、この声明は「真理に反しており」「したたかなるペテンである」とやり返す⁽⁵⁾。

この応酬は、ウィーン子たちに恰好の話の種を提供した。カフェハウスやビールスタンドで、あるいはちょっとした会合でも、ユダヤ人を中傷するローリングの記事が読みあげられ、いったいタルムードには何が書いてあるのだ、といったことがおもしろおかしく話題にされる。ところがゲマインデの方は、再度の反撃に出どころか、さっさと矛先をおさめてしまった。若きラビ、ブロッホは、このさい真剣に『タルムード・ユダヤ人』を論駁すべきだと主張するのだが、イエリネクはいう。「ローリングはアイゼンメンガーから新たな引用を引き出しては、公衆の前に持ち出すだろう。私には、アイゼンメ

ンガー全部に反駁を加えることなどやってはいられない⁽⁶⁾。」

ウィーンの普通のユダヤ人にとって、タルムードに着せられた濡れ衣が晴らされるのは結構なことではあるが、タルムード論争の過激化は迷惑でもあった。自分たちが日頃親しんでいるのは、ウィーンの演劇や文学であり、音楽や諸々の芸術である。ユダヤ教徒であるといっても、タルムードなどろくに読んだこともない。巷でキリスト教徒からタルムードについてあれこれ言われても、自分たちには説明もできなければ、反論のしようもないから、話題を変えてしまうのが最もよい逃げ道となる。彼らとしては、ローリングのような人物のでたらめな言説にいちいち反論して論争を長引かせるより、論争がやがて人々に飽きられ、口の端にのぼらなくなれば、それはそれでよかったのである。

ウィーンのユダヤ人社会を支配するこのような雰囲気に対して、怒れる「妖怪」ブロッホは、まさしく一石を投じることになった。

ブロッホは、ローリングに対する論駁「ローリング教授とウィーンのラビ職、あるいは『したたかなるペテン』」をほとんど一気呵成に書きあげた。とはいえこの原稿をどこに持ち込めばよいのか。当時のブロッホは若干32歳。ウィーン郊外の労働者地区フローリツドルフの無名の地区ラビにすぎない。その時、何の条件も付けることなくブロッホに紙面を提供したのが、テオドーア・ヘルツカが発行する日刊紙『ヴィーナー・アルゲマイネ・ツァイトウング [ウィーン一般新聞]』であった。ブロッホはヘルツカの好意を裏切ることとはなかった。ブロッホの論文を付録として掲載した1882年12月22日号は、屋にはすでに売り切れとなり、2刷り、3刷りもたちまちのうちに売れていった⁽⁷⁾。ブロッホのおかげで、ウィーンのラビたちも普通のユダヤ人も面目を回復することができ、ブロッホは一夜にして有名人となる。これでことが終われば、ブロッホの反論は快挙と称賛され、すべては円満に収まったであろう。ところがブロッホは、ローリングを切りつけた返す刀で、反ユダヤ主義という「ヒドラ」に対して何もしようとしないうダヤ人たちにも容赦なく切りつけたのである。

ヘルツカの新聞に掲載された論文は別刷りの小冊子として発行されたが、そのさいに書き加えた序文でブロッホは、反ユダヤ主義に対して抗議の声ひ

とつあげようとしないうダヤ市民の無為無策、「自分がユダヤ人であることを忘れ、敵もまたそれを覚えてはいないだろう、と夢のようなことを考えている」ユダヤ人政治家の無為無策、ユダヤ人ジャーナリストたちの沈黙、ユダヤ人所有者や編集者によって発行されているにもかかわらず、「ユダヤ新聞」と呼ばれることを嫌い、ユダヤ人問題にいっさいふれようとしないうィーンの大新聞——『ノイエ・フライエ・プレッセ』——の態度を容赦なく批判する。そして反ユダヤ主義との闘いに場を提供してくれたヘルツカの新聞を称賛して、ユダヤ人はこの新聞に恩義を感じるべきであり、その普及に努めることが義務である、とその序文を締めくくったのである⁽⁸⁾。

この出すぎた振る舞いによってプロッホは、ウィーンのユダヤ人エスタブリッシュメントたちの感情をすっかり損ねてしまう。それに、よりにもよってなぜヘルツカの新聞を持ち上げるのか。

近代のユダヤ人解放は、自由主義を理論的支柱としてきた。それゆえウィーンのユダヤ人指導者たちが一貫して頼りとしてきた政党は、1848年3月革命の記憶を共通の基盤として持つドイツ自由派である。その支持層は1850年代の経済成長によって台頭した大ブルジョア層であり、経済的にはレッセ・フェール政策を支持する。1867年憲法は、自由主義的立憲体制を確立しようとする彼らの運動によって実現を見たのであり、この憲法によってユダヤ人は法の下での平等権を獲得した。ウィーンのユダヤ人はドイツ自由派の熱烈な支持者となる。憲法の擁護者を自認するドイツ自由派が安泰であるかぎり、オーストリアのユダヤ人の地位も安泰であると思われた。

しかしドイツ人は帝都ウィーンでこそ多数者であったが、多民族国家オーストリアの中では決して多数者ではない。そのドイツ人が他の諸民族に対して中央集権的な支配権を独占し続けようとする時、スラヴ系諸民族の反抗は必至であった。チェコ人議員が帝国議会をボイコットするという異常事態を顧みず、教養と財産のあるドイツ人名望家によって旧態依然たる帝国議会支配を続けようと試みたドイツ自由派は、1879年にはついに過半数を失う。そして同年8月に皇帝の命をうけたターフェは、チェコ人議員を呼び戻して保守連立の和解内閣を成立させ、チェコ人、ポーランド人、スロヴェニア人が議会で優位を占めるにいたった。ドイツ自由派はしかし、ターフェ政権を

拒否する態度に出る。反スラヴ、反教権主義を唱えるドイツ自由派は政権を離脱し、1881年11月に連合左派にまとまってターフェ内閣に対立した。これを喜んだのは、ドイツ自由派の反教権主義を好ましく思っていなかったドイツ人のローマ・カトリック勢力である。彼らはターフェの鉄の輪に参加することになる。

ユダヤ人の政治的解放の実現において、ドイツ人自由主義者の功績を否認することはできまい。だがいまにいたっても、ウィーンのユダヤ人がドイツ自由派に忠誠をつくし、彼らドイツ人と政治的運命をともにすることが有益なのか。ヘルツカの新聞を支持するブロッホが問題にしたのはこの点である。

スラヴ系諸民族の民族意識の高揚に刺激されて、ドイツ民族主義もまた活性化し、先のシェーネラーは「ドイツ民族協会」を結成する。こうした民族対立の先鋭化は、1848年革命のユダヤ人闘士アードルフ・フィシュホーフを再び立ちあがらせた。すでに1869年発行の小冊子『オーストリアとその存続の保障』において、オーストリアの存続と発展は、オーストリアが地方分権化され、民主的な地方自治と民族自治に基づく連邦国家になることによってのみ可能であると説いていたフィシュホーフは、事態を憂慮し、みずからの理念の実現に乗り出したのである。1882年7月16日フィシュホーフは、彼に共鳴するドイツ人および非ドイツ人の民主主義者を糾合して、「ドイツ国民党」の結成集会を開催する。ヘルツカはフィシュホーフの協力者であり、ブロッホもこの集会の参加者の1人であった。ところがこの集会の会場に、ドイツ民族主義ユダヤ人で、シェーネラーのリンツ綱領の起草者の1人であったハインリヒ・フリートユング、および彼に率いられた一派——その多くはユダヤ人学生——がなだれ込んだ。そしてドイツ自由派とそれを支持するウィーンのユダヤ人は、フリートユングらの乱暴狼藉ではなく、フィシュホーフの行為の方をオーストリアにおけるドイツ人の優位を損なうものとして非難し、『ノイエ・フライエ・プレッセ』はフリートユングらの妨害行為に対していっさい沈黙したのである。小冊子『ローリング教授とウィーンのラビ職、あるいは「したたかなるベテン」』の序文で、ブロッホのユダヤ人ジャーナリストやユダヤ人の発行する大新聞に対する批判は、この事件をふまえたものであった。

同じユダヤ人の側からの攻撃によって挫折させられ、傷ついたフィッシュホーフは、ブロッホに次のように語ったという。「ウィーンのユダヤ人は、凶暴な反ユダヤ主義をとまなう、たちの悪い反動が始まるだろうことがわかっていないのだ。国民党を創設しようという私の試みは、それを防いだであろうのに。なんとユダヤ人自身が、この救済の試みを妨害したのだ⁽⁹⁾。」フィッシュホーフは、この事件を最後の政治の舞台から身を引く。

みづからをドイツ人であると自認し、ドイツ民族主義者と行動をとともにするユダヤ人が、ドイツ人から仲間と見なされていなかったとすれば、そのユダヤ人の行動は戯画に等しいであろう。「ドイツ民族協会」のシェーネラーが、その綱領に反ユダヤ条項を追加し、公的生活の全分野からユダヤ人を排除するよう要求したのは1885年のことである。その時ドイツ民族主義者のユダヤ人フリートユングは、シェーネラーのもとを去ることを余儀なくされる。それでもフリートユングのドイツ民族主義は変わることはなかったが。

フィッシュホーフが憂慮したとおり、激化する一方の民族対立のはざまにあって、ユダヤ人の立場はますます微妙になってゆく。1897年4月5日のパデーニの言語令がチェコに引き起こしたドイツ人とチェコ人の対立は、同年の11月から12月にかけて頂点に達する。チェコに住む中流階層以上のユダヤ人のほとんどはドイツ語を話し、ドイツ文化に親しみを持つ人々であったため、チェコ・ナショナリズムの鋒先はユダヤ人にも向い、11月29日から12月2日にかけてプラハではポグロムが発生、チェコ人によりユダヤ人の商店やシナゴグが略奪、破壊、放火された。しかしチェコのドイツ人たちは、ユダヤ人の期待に反して、この「ドイツ・ユダヤ人たち」を同盟者と見なしてはいなかった。政治的シオニズムの創始者テオドーア・ヘルツルが『『消え去った』時』で指摘しているように、ドイツ人がユダヤ人を攻撃しないのはチェコ・ナショナリズムが荒れ狂っている期間でしかない。ボヘミア西部の小都市でドイツ語地域に属するエーガーとザーツでは、ドイツ人により、非ドイツ人であるユダヤ人に対してポグロムがしかけられたのである⁽¹⁰⁾。ウィーンのユダヤ人は、これらのポグロムをよそ事と見なしてよいのか。

ブロッホは回想録の中で、事態はフィッシュホーフの予言どおりに進行したとする。フィッシュホーフの1882年の集会の参加者であった、著名な民衆の友

にして民主主義者のフェルディナント・クロナヴェッターもまた、1898年のフィッシュホーフについての公演で、ユダヤ人の聴衆に次のように語らなければならなかった。

「率直に申し上げなければなりません、ドイツ国民党は、ユダヤ人からは何の励ましも受けることはありませんでした。いや、われわれはまさしくユダヤ人側から最も激しく攻撃されたのです。ユダヤ人の行為が正しかったかどうか、1898年の今日、あなた方は判断できることでしょう。今日なら、あなた方は1882年の時とは違う考え方をするだろうと思うのです⁽¹¹⁾。」

ターフェは、ローリングとの論争で一躍有名になったブロッホが、自分の政権に好意的であることを見逃さなかった。ウィーンのユダヤ人を少しでも自分の陣営に近づけたいターフェは、文部大臣に対し、ウィーン大学哲学部の古代ヘブライ学の教授にブロッホを任命するよう要請する。この要請に対して、当該の学部や保守的なカトリック政党から激しい反対が出ることは、ターフェには予想されていたことである。それにこの時までブロッホは、キリスト教神学者ローリングとの裁判で、勝ちと決まっていたわけではなかった。ところが反対は、ユダヤ人の側からも出た。この人事について見解を求められたイエリネクは、次のように回答した。「ブロッホ博士をウィーン大学の教授に任命する計画は、ウィーンのユダヤ人に対する挑発に他ならないといえましょう⁽¹²⁾。」イエリネクは、ブロッホの任命によって、ウィーンのユダヤ人の反ターフェ姿勢がいっそう強まると示唆したのである。結局ブロッホの任命は実現せず、同様の事態が再び起こることを恐れた哲学部は、急速アラビア語の講師であったミュラーを古代ヘブライ学の教授にあてた。イエリネク自身は、このとり損ねた餌を悔やんだというが、ターフェがどのような餌をちらつかせようとも、「われわれはターフェのところへは行かない⁽¹³⁾」というのが、ウィーンのユダヤ人の信念だったのである。

ブロッホは回想録の中で、ターフェにとって、ユダヤ人の支持をとりつけることはそれなりの意味を持っていたはずだとする。それゆえウィーンのユダヤ人がターフェをうまく利用するなら、反ユダヤ主義に対してターフェに積極的な措置をとらせることも不可能ではなかったとする。ターフェには、皇帝という強力な後押しがあったのだから。ところが「ユダヤ人は、自分た

ちの「ドイツ人」としての立場上、ターフェ内閣とのいかなる接触も避けるのが自分たちの義務だと信じていた⁽⁴⁾」のである。

「のらりくらりと、その場その場をしのいでいるfortwursteln」といわれたターフェの内閣に、ブロッホのように過剰な期待をかけるのは滑稽かもしれない。だがブロッホに言わせるなら、ドイツ自由派の自由主義がその内実を失っているにもかかわらず、その自由主義の力を信じているウィーンのユダヤ人もまた滑稽である。ドイツ自由派は自由主義憲法の擁護者だというのが、彼らがユダヤ人のために何をしてくれたというのか。1885年の帝国議会選挙で、シェーネラーらは349議席中ではじめて23議席を獲得した。しかしドイツ自由派は、1879年の170議席からさらに議席を減らしたとはいえ、まだ114議席の優位を保っていた。にもかかわらずシェーネラーらの明らかに自由主義の原則を踏みにじる反ユダヤ主義活動に対し、何の方策も講じてくれはしない。ウィーンのユダヤ人たちはターフェ政権が倒れるのを待っていたが、ターフェはどの前任者よりもどの後任者よりも長く政権の地位にいた。結局ターフェに敵対するウィーンのユダヤ人は、そのあいだ何もしないという状況が生まれたのである。

もちろん帝国議会にユダヤ人議員がいなかったわけではない。しかしユダヤ人議員は、自分の所属する党の一員として議会に出ているのであって、彼らはユダヤ人選挙民の利益代表者としては行動しなかった。彼らはユダヤ人にかかわる問題を議題として提出することはおろか、反ユダヤ主義者が持ち出した議論に加わることもしようとしなない。ユダヤ人議員は、彼らにとっても愉快とはいいがたい反ユダヤ主義的な議題が審議にのぼる時は、むしろ議事を欠席する方を選んだ。それどころか、ユダヤ人議員による不用意な反ユダヤ発言まで出るありさまである。上院議員であった男爵モーリツ・フォン・ケーニヒスヴァルターは、ガリツィアのハシディズムの指導者たちを非難している。

「帝国の東方諸地域では、狂信的なラビが支配権を握って広範な影響力を発揮し、その職業上の活動だけでは満足せず、人々の生活のあらゆる領域を支配下においております。ガリツィアのラビは、家族や商売や職人業、土地の賃貸借関係や政治、はたまた裁判にまで干渉し、しかもこの干渉は、必ず

しも言葉による警告や賢明なる忠告によるとはかぎりません。それらで不十分な場合には、中世的な強制手段に訴えられるのです。たしかにこれは時代の精神を嘲笑するものであります⁽¹⁵⁾。」

反ユダヤ主義者が、ユダヤ人による反ユダヤ発言を喜んで引用したのはいうまでもない。「反ユダヤ主義のうねりは、ユダヤ人の不活動と政府の消極的な態度により、巨大なものとならざるをえなかった⁽¹⁶⁾。」このような状況の中で、1884年と1885年にガリツィアから帝国議会へ選出されたブロッホは、帝国議会で反ユダヤ主義と闘うはじめてのユダヤ人議員であった⁽¹⁷⁾。そして大金持のケーニヒスヴァルターに向かって、反ユダヤ主義にさらされているのは「ユダヤ人の小商人やブラーターの貧しく寄る辺のない行商人⁽¹⁸⁾」であることがわかっているのか、と言わなければならなかった。

- (1) 中世ヨーロッパで成立したユダヤ人に対する浮説のひとつ。ユダヤ人がキリスト教徒の子供を殺し、その血をユダヤ教の儀式に使用するというもの。
- (2) 後に行方不明の少女は川で投身自殺したことが明らかになった。
- (3) Hans Tietze, *Die Juden Wiens*, Wien/Leipzig 1933, S. 245.
- (4) Joseph S. Bloch, *Erinnerungen aus meinem Leben*, Wien/Leipzig 1922, S. 59f.
- (5) Joseph S. Bloch, *Prof. Rohling und das Wiener Rabinat oder "Die arge Schelmerei"*, Separat=Abdruck der Wiener Allgemeine Zeitung vom 22. Dezember 1882, S. 4.
- (6) Bloch, *Erinnerungen*, S. 64.
- (7) Ebd., S. 65. デーリチュはブロッホの論文を「これまでローリングに対して書かれた反論のうちで最良のもの (Ebd., S. 72)」と評価した。
- (8) Ebd., S. 74f.
- (9) Ebd., S. 57.
- (10) Theodor Herzl, *Die "entschwundenen" Zeiten*, 1897, in : Leon Kellner (Hg.), *Theodor Herzl's Zionistische Schriften*, 1. Tl. Berlin-Charlottenberg o.J. S. 307f. 「『消え去った』時」, テオドール・ヘルツル, 佐藤康彦訳『ユダヤ人国家』, 法政大学出版局, 1991年, 114ページ以下に所収。
- (11) Bloch, a. a. O., S. 58.
- (12) Ebd., S. 163.
- (13) Ebd., S. 167.
- (14) Ebd., S. 167.

(15) Ebd., S. 188.

(16) Ebd., S. 167.

(17) 1879年の帝国議会選挙から、ガリツィア選出のユダヤ人議員はすべてポーランド・クラブに所属することを義務づけられ、ブロッホもその一員となった。ブロッホがターフェ政権の与党であるポーランド・クラブの議員として活動したことは、ウィーンのドイツ自由派ユダヤ人の反発をかったが、他方でブロッホは、その反ユダヤ主義攻撃によってポーランド・クラブの不興をかう。クラブが望んでいたのは、親ポーランド的なユダヤ人だけだからである。1891年の帝国議会選挙では、ブロッホは再選されたものの、反ユダヤ主義者とクラブの圧力により、1895年任期半ばで辞任に追い込まれた。

(18) Ebd., S. 187.

(2) オーストリア神話と反ユダヤ主義のはざま

帝国議会議員のブロッホがただちに着手したのは、反ユダヤ主義に対して論陣を張るための新聞の創刊であった。自分の新聞があれば、「ローリング教授とウィーンのラビ職」の時のような苦勞をすることもない。しかしこのさい、ウィーンの金持ちユダヤ人から資金援助を期待しても無駄である。大富豪のユダヤ人議員ケーニヒスヴァルターなどは、「ガリツィアのラビ」が大嫌いときているのであるから。1884年10月15日に『オーストリア週報 Oesterreichische Wochenschrift』の創刊号が出た時、資金を提供したのは、ガリツィアのユダヤ人町ブローディから選出されたキリスト教徒の帝国議会議員で、ユダヤ人選挙民に恩義を感じているゾーホルであった⁽¹⁾。

創刊号でブロッホは、反ユダヤ主義と闘うユダヤ人市民団体の結成を呼びかける。

「あらゆる政党がわれわれを攻撃している。誰もわれわれのことを考えてはくれず、盟友関係はお荷物で信用のできないものになってしまった。われわれ自身の側では無力感が広まり、卑怯な改宗者が日毎に増えている。ところがわれらの指導者たちは懐に手をつっこみ、なりゆきを天意に委ねている。[引用、中略] われわれは迫り来る危険に向かって開かれた目を持つすべての人に対し、われらが太古の民族的ルーツによせるその愛と熱き心に訴える。共同の行動のために、相互防衛のために集まり、ユダヤ人の市民団体の結成

に着手しようと⁽²⁾。」

ユダヤ人指導者たちに対する手厳しい批判のお返しでもあるまいが、ゾーホルは『オーストリア週報』への継続的支援を約束していたにもかかわらず、約束は、ユダヤ人側からの妨害によって実現を見なかった⁽³⁾。しかしブロッホは孤立無援だったのではない。

翌1885年4月4日、ブロッホの呼びかけに賛同する者たちが集まって私的な意見交換会がもたれ、後に「オーストリア・イスラエル同盟」と命名される市民団体の結成に向かって具体的に動き出すことになった。この会合の詳細を報じる『オーストリア週報』は、主だった参加者としてブロッホの他、ジークムント・ツィンス、ヨーゼフ・グリューンフェルトなど8名の名をあげている。団体の課題は、「ユダヤにかかわるすべての問題において、共同の目的意識に根ざした政治行動を起こすこと、宗教教育の改良、ユダヤ人のあいだにユダヤ人の歴史に関する知識を拡大し、ユダヤ人のルーツに対する意識 *Stammesbewußtsein* の高揚と促進のために働きかけること、急速に広まりつつある「ユダヤ人の反ユダヤ主義」に対してフロントを形成すること、宗教的、人種的対立の激化をはかるあらゆる運動を可能なかぎり抑え込むこと」とされる。ブロッホは団体の規約作成委員会の委員長に選出されるが、ポーランド・クラブ所属の帝国議會議員であることを理由にそれを断り、ブロッホにかえてツィンスが選出された。ブロッホは委員会そのものにはとどまる⁽⁴⁾。

委員会はさっそく団体の設立趣旨を公表し、広く参加を募ったが、呼びかけの対象は *Glaubensgenossen*、すなわちユダヤ教という信仰によって結ばれた「信徒諸君」ではない。信徒の共同体としてはゲマインデがあり、ユダヤ教の中の宗派で構成されたさまざまな団体もすでに存在する。そうではなく対象は *Stammesgenossen*、すなわち同じルーツによって結ばれた「同族諸君」である。この呼びかけにはもちろん、「ユダヤ教を信仰するドイツ人」を名の人々への挑発がこめられていた。なぜならブロッホは回想録の中でフリートユングらを意識しながら、「新しい団体が「信徒諸君」ではなく、「同族諸君」を相手としたことは、おそらく注意をひいたであろうが、まだ[強調は引用者による]怒りをかきたてはしなかった⁽⁵⁾」と述べているから

である。

しかし種族と訳されることの多い Stamm という語をユダヤ人に適用する時、団体の課題とされる Stammesbewußtsein の高揚とは何を意味しているのか。後に団体の規約を確定する過程でこの語は、外部からの攻撃によるよりも、団体内部での検討の結果として規約文から消えるのだが、当初のブロッホ自身は Stammesbewußtsein の内容をどのように考えていたのか。さらにまた団体の課題は、「ユダヤにかかわるすべての問題において、共同の目的意識に根ざした政治行動を起こすこと」とされるが、「政治行動」とは、どのようなことをいうのか。ここで注意すべきは、ブロッホはユダヤ人の民族政党を旗揚げしようとしたのではないことである。

政治家ブロッホに影響を与えたフィシュホーフは、すでに述べたようにドイツ人による中央集権的支配を廃し、地方分権と諸民族の自治を提唱していた。しかしフィシュホーフは、ユダヤ人の問題については特別に考察しておらず、ブロッホもまた、フィシュホーフの民族自治の考え方を政治的な意味でユダヤ人に適用しようとしたわけではない。むしろブロッホが唱えたのは、ユダヤ人があらゆる民族対立の圏外に立つことである。ブロッホの『民族対立とオーストリアのユダヤ人』は、「オーストリア・イスラエル同盟」の最終規約ができあがる前に執筆され、その性格付けにも深く関係したと考えられるが、そこでブロッホはいう。

「民族的排他主義は、とにかくユダヤ人を仲間から締め出してしまった。この事実をある者は認めようとせず、ある者は遺憾に思うかもしれないが、この事実をないものにすることはできない。」

「われわれがドイツ民族派やチェコ民族派のごとく振る舞うなら、必ずやそれは愚かな戯画となろう。事実の論理と政治的思慮の命ずるところによってわれわれに明らかなことは——あらゆる民族的党派の圏外に立つことである⁽⁶⁾。」

ここでブロッホは、ユダヤ人が他民族の民族運動に与せず、自分自身を守るために団結し、自分のユダヤ性を自覚することを求めるが、だからといってユダヤ人に民族政党を結成し、民族闘争の渦中に飛び込めとすすめるのではない。むしろブロッホは、民族主義に酔って闘いを繰り広げている諸党派

から身を引くよう訴えるのである⁽⁷⁾。

ブロッホによるユダヤ人意識の強調が、先に述べた、反ユダヤ主義という「ヒドラ」に対して何もしようとしないウィーンのユダヤ人に対する痛烈な批判を含むことは明らかである。しかし『民族対立とオーストリアのユダヤ人』のブロッホが、ユダヤ人は、たとえばハンガリー人やチェコ人のように民族独立要求や政治的自治権要求の主体とはならない考えるかぎりで、「ユダヤ種族」の捉え方に関して、実は「妖怪」ブロッホと旧世代のイエリネクらのあいだに決定的な溝はなくなる。『ユダヤ種族』という表題の書物を世に出し、その特性をさまざまな角度から検討したのはイエリネクその人であった。

『ユダヤ種族』の出版年は、オーストリアでユダヤ教徒の法的平等を実現した1867年12月の憲法より後の1869年であるが、同書に収録された諸論文のうち、第1部の第9章までは1861年に週刊新聞『ノイツァイト [新時代]』に発表されたものである。そこでのイエリネクの問題意識は、多民族国家オーストリアにおいて、表題の「ユダヤ種族」がいかなる立場の人々として解放されるべきか、ということであった。

イエリネクによれば、種族ないし民族Volkを知るためには、その言語と宗教、また文学などの創作活動においてあらわれる精神や歴史、行動様式や生活上の風俗・習慣を吟味しなければならないが⁽⁸⁾、イエリネクは、ユダヤ人がこれらの要素のひとつひとつにおいて独自の種族的特性を持つ人々であることを立証する。しかしそのさい、言語、宗教、文学、歴史、行動、風俗・習慣等のすべてに共通してあらわれるユダヤ種族のきわだった特性とは、まさしくその特性が自己完結的に閉じられたものではなく、あくまでも普遍性へと開かれていることにあった。イエリネクは、分離主義と普遍主義の両立こそ、ユダヤ種族の種族的特性だということである。言語についていえば、特定の種族語あるいは民族語を持つことがユダヤ人を種族として他から区別するのではなく、むしろユダヤ人がユダヤ教においてはヘブライ語を保持しながら、それぞれの居住国の言語をわが言語としてきたこと、ここにこそユダヤ種族の特性があらわれている。この特性のゆえにユダヤ種族は、周囲の文化や風俗・習慣を受容して発展することが可能であったのだ。ユダヤ教に

ついていえば、その祭儀律にユダヤ種族の分離主義が維持されているのに対し、ユダヤ教の道德律には、その普遍主義があらわれていた⁽⁹⁾。

イエリネクは、ユダヤ人がたんにユダヤ教を信仰する人々ではなく、他の諸民族や諸種族と同様に、否認しがたい種族的特性を持つ人々として承認されることを求める。しかしイエリネクの考えるユダヤ種族の特性が上記のようなものであるとすれば、ユダヤ人は過去のルーツこそ同じであるかもしれないが、現在の「ユダヤ種族」の発現形態は、まさしくその種族的特性のゆえに、ユダヤ人が生まれ育ち、教育を受け、その言語を語っているそれぞれの国のユダヤ人、すなわちドイツ・ユダヤ人であり、フランス・ユダヤ人である、ということになる。それゆえイエリネクは、ユダヤ人は国民 Nation ではありえないとする。

イエリネクによれば、「ユダヤ人が持つのはナショナルなもの Nationales ではなく、種族的諸特性 Stammeseigentümlichkeiten のみである。ユダヤ人はその普遍主義のおかげで、自分たちが生まれ育った諸国を受け入れている。それゆえユダヤ人は100パーセントの権利を持ってこう言うことができるだろう。われわれはフランスではフランス国民に、ドイツではドイツ国民等々に帰属するのだと⁽¹⁰⁾。」

このように言われる時、イエリネクの「フランス国民」や「ドイツ国民」とは、過去に遡ればさまざまなルーツを持ちながらも、現在「フランス」や「ドイツ」と呼ばれる国家の総体に帰属意識を持つ人々の集まりのことになる。「国民」の種族的、民族的多様性は、オーストリアについていえば、きわめて具体的なものであった。種族とは、一般には部族や氏族と同じく、民族の下位区分をさす語としてイメージされ、たとえばドイツ民族を構成するゲルマン諸部族といわれる場合の部族がそれにあたる。この系統的な用語法からいえば、オーストリアのガリツィアでポーランド語を語るユダヤ人をポーランド民族の下位区分に位置づけたり、ウィーンでドイツ文化に染まったユダヤ人をドイツ民族の下位区分に位置づけるのは無理がある。しかしガリツィアのユダヤ人もウィーンのユダヤ人も、オーストリア国民の下位区分にはなりえよう。そしてイエリネクは、オーストリアのユダヤ人は、ガリツィアのイディッシュ語のユダヤ人であれ、ウィーンでドイツ語を語るユダヤ人

であれ、ポーランド人やドイツ人やチェコ人とともに、オーストリア国民として平等でなければならない、と考えるのである。イエリネクが自著のタイトルを『ユダヤ種族』とし、「ユダヤ民族」としなかったのは、民族自治や民族独立の要求において、民族という語が、国民国家形成の主体になりうるものとして使用されるからではないか。イエリネクに言わせるなら、ユダヤ人はチェコ人やポーランド人のようにいかなる自治権も独立も要求せず、オーストリア国民であることに徹するがゆえに、ユダヤ人こそ真のオーストリア人なのである。

ブロッホもまた、イエリネクと同じ真のオーストリア人の立場に立つ。ブロッホは、オーストリアのユダヤ人は、ドイツ人ともチェコ人とも異なるルーツにつながるという意味でひとつの種族であるが、排他的な民族主義を超越している人々だという。ユダヤ人に対してブロッホが自覚を促す *Stammesbewußtsein* は、ドイツ民族主義やチェコ民族主義といわれるさいの民族主義へと結晶するのではない。*Stammesbewußtsein* とは、あくまでもみずからのルーツに対する意識なのである⁽¹¹⁾。ブロッホはユダヤ人に対して自分のルーツに誇りを持つよう求めるが、そのルーツ意識は民族主義ではなく、民族主義を超越したヒューマニズムの理想へと連なる。ブロッホにとってオーストリア・ユダヤ人の使命とは、多民族国家オーストリアにおいて、どの民族主義にも与せず、みずからも政治的民族にならず、諸民族の宥和を実現する媒介者となることに求められたのである。

第1次世界大戦後にハプスブルク帝国が諸民族の国家へと崩壊した後になって、旧時代を懐かしむユダヤ知識人たちは繰り返し、老フランツ・ヨーゼフを父と仰いだ旧ハプスブルク・オーストリアは、諸民族の調和と幸福が実現された超民族主義国家であった、と懐かしむ。彼らによれば旧オーストリアにおいて、歴史的帰属権を主張できるような土地を持たず、共通の民族語も持たず、さまざまな民族の土地にまたがって住むユダヤ人は、その存在のあり方からして民族を越えていたがゆえに、超民族主義を国家理念とするオーストリアの中の真のオーストリア人であった。

帝国の崩壊によって暴露されたように、オーストリアでの諸民族の調和は見かけの上のものでしかなく、それゆえ後のユダヤ知識人が懐かしむ「幸福

で、調和のとれた時代」「秩序あるおとぎの国のような中欧世界」としてのハプスブルク・オーストリア像は神話でしかない⁽¹²⁾。この点でブロッホは、ユダヤ人のオーストリア神話をオーストリアの他の諸民族が共有しているわけではない、と考えるかぎりで現実的であった。真のオーストリア人の生存権が、ひとえに超民族主義国家オーストリアの存在にかかっているのであれば、フィッシュホーフが唱えたように、ユダヤ人は多民族国家オーストリアの存続のために、あらゆる努力をかたむけるべきなのである。ブロッホはターフェ政権の鉄の輪に、そのひとつの努力を見た⁽¹³⁾。ブロッホは、ユダヤ人がドイツ自由派と癒着し、オーストリアの支配民族であるドイツ人が支配権を回復すれば、オーストリアの安定もまた回復されるかのごとく期待するのは、ユダヤ人にとって致命的だというのである。さらに反ユダヤ主義についていえば、ユダヤ人はユダヤ人として、自由派のドイツ人に対してであれ、チェコ人やポーランド人の民族主義者に対してであれ、断固として異議を唱え、自分たちのオーストリア国民としての平等を主張すべきだというのである。これが「オーストリア・イスラエル同盟」創設当時のブロッホの考え方であった。

こうしてできた「オーストリア・イスラエル同盟」は、反ユダヤ主義と闘う団体ではあるが、ユダヤ人のための民族主義的政治団体ではない。次節で述べるように、同じくフィッシュホーフをふまながらシオニストはユダヤ人を民族と規定し、フィッシュホーフの民族自治の考え方をユダヤ民族にも適用しようとする。シオニストの考える民族意識 *Volksbewußtsein* がめざすものは、ブロッホやイエリネクのルーツに対する意識と同じではない。しかし「同盟」が立ち上がった時、「同盟」派のユダヤ人とドイツ人を名のるユダヤ人との対立は意識されていたが、シオニストの考えるユダヤ人意識とブロッホの考えるユダヤ人意識の相違は、なお混沌としていた。この相違は、後に「同盟」派とシオニストの激しい対立の中で明らかになるであろう。

「同盟」の規約は、規約作成委員会発足の約1年後にニーダーエスターライヒ州当局から認可を得るまで、2度書き直されている。結果としてできあがったのは、きわめて穏健な性格のものであった。1886年4月24日の設立総会で満場一致で採択された規約の第1条では、「種族」という人種的分離主

義を連想させるきわどい語は姿を消し、「同盟」の目的は次のように述べられる。

「本会の目的は、オーストリアのユダヤ人のあいだにユダヤの学問とユダヤにかかわる諸問題に対する関心を喚起すること、ユダヤに関して流布している謬見や偏見をただして除去すること、最後に宗教的、人種的対立の激化をはかる運動と闘うことである。」

さらに「同盟」のとるべき政治行動とは、規約の第2条第2項および第3項でいわれるところによれば、「オーストリア帝国議会で審議にのぼせられたユダヤにかかわるあらゆる問題を検討し、請願、決議その他によって、それらに対する見解を表明すること」や、場合によっては法廷闘争に持ち込むことを意味していた⁽⁴⁴⁾。

規約から種族という語が消された理由のひとつは、当局から団体設立の認可をとりつけるための配慮であろう。次節で述べるシオニストの学生団体「カディーマ」の規約でも、「同盟」の規約の第1条と類似の表現で、団体の目的は「いかなる政治性も排除し、ユダヤの文学および学問を育成すること」とされ、ユダヤ民族主義を疑わせるような語句ははずされている。しかしカディーマの場合には、それが認可をとりつけるための作戦であったのに対し、「同盟」の場合には、その要素がなくはないとしても、削除はより積極的な意味を持つ。なぜならそのことによって「同盟」は、ウィーンのユダヤ人エスタブリッシュメントたちを完全に敵にまわすことを避け、さまざまな程度のユダヤ人意識を持つ人々を広く集めることに成功したからである。

「同盟」に集まったユダヤ人には、これから新たに社会的上昇をめざす新興の中産階層に属する者が多い。1885年4月4日の会合に名を連ね、「同盟」設立の中心となった8人の職業を見ると、法律家、医師、大学講師といった専門職に就く者が6名で、商人や銀行家といったウィーンのユダヤ人エスタブリッシュメントの伝統的職業に就く者を上回る⁽⁴⁵⁾。ブロッホの「同盟」設立の動機からしても、「同盟」の設立総会でツィンスが、反ユダヤ主義との闘いは、まずは「ユダヤ人の反ユダヤ主義」の撲滅から始めなければならない、と明言していることから⁽⁴⁶⁾、発足当時の「同盟」は、反ユダヤ主義を静観するウィーンのユダヤ人エスタブリッシュメントに対する、新興中産

層からの批判という性格を色濃く持っていた。しかしこの点で、1904年から長年「同盟」の会長を務めることになったジークムント・マイアーは、ウィーンで大商人として功成名とげた、むしろ旧世代のエスタブリッシュメントに属する人である。世紀末ウィーンのユダヤ人のアイデンティティ問題についてはすでに別稿で詳述したが、マイアーがその回想録の中で、「反ユダヤ主義が私を〔ユダヤ人であるという〕不快な発見へと導いた⁽⁷⁷⁾」と語っているのは、「同盟」に集まったユダヤ人たちのユダヤ人意識のひとつのあり方を端的にものがたる。反ユダヤ主義は、このマイアーを「同盟」に導き、穏健化された「同盟」の規約は、このようなマイアーをも一員に取り込むことを可能にしたのである。それに「同盟」に集まった血気盛んな若手のユダヤ人にしても、その多くは社会生活の実際においては、彼らが批判した旧世代の素朴な同化主義ユダヤ人とそれほど違っているわけではない。彼らもまた、ドイツ・ウィーンの世界文化をわがものとした人々であった。

「同盟」は、反ユダヤ主義との闘いをどのように進めようというのか。「同盟」は政党ではなく、第2章第2節で述べる1890年の法律によって「ユダヤ教徒の団体」と規定されたゲマインデも、もちろん政治的な団体ではない。だとすれば反ユダヤ主義との闘いは結局、議会外では合法的な法廷闘争に、議会の中では既成政党やユダヤ人議員の個人的な活躍に頼らざるをえない。

1891年の帝国議会選挙を前にユーリウス・ツンスは、1889年の末に執筆した「オーストリアの反ユダヤ主義運動に関する覚書」を短縮版にして刊行した。覚書の中であいかわらず手厳しく批判されているのは、反ユダヤ主義に対して声をあげないユダヤ人議員や、指導的立場にあるユダヤ人たちである。シェーネラーらの一派が、ことあるごとに下品で嘘に満ちたやり方でユダヤ人を攻撃しているのに、16人もいたユダヤ人議員たちは、なぜ抗議の声ひとつあげようとししないのか⁽⁷⁸⁾。シェーネラーらの不正行為を暴こうと思えば、いくらでもできたはずなのにである。ツンスは、自由主義を掲げる政党も、ユダヤ人の助けにはならないという。「彼らは、人種対立の扇動者たち呼ぶとおり、「ユダヤ政党」とか「ユダヤ自由派」と見なされなくなかったからである⁽⁷⁹⁾。」

このような現状の中でツンスは、来る選挙においてユダヤ人のとるべき行動を次のようにまとめる。

「まず第1に、反ユダヤ主義候補と闘わなければならない。そのために重要なことは、少なくとも数名の気概のある、エネルギーなユダヤ人を帝国議会に送り込むよう、全力を傾けることである。すなわち反ユダヤ主義者たちの腐敗墮落と、きちんとした仕方、シェーネラーやルエーガーやその仲間たちがユダヤ人攻撃のさいにやったのと同じような、そして今もその度を増しているのと同じような迫力と容赦のなさで闘う人物を送り込むことだ。そしてこうした闘いをつうじて、ユダヤ人に対するいわゆる倫理的憤慨なるものが、実は嘘偽りにすぎぬことを証明するような人物を送り込むことだ。ユダヤ人議員の数が問題なのではない。問題はその質である⁽²⁰⁾。」

しかし帝国議会において、ブロッホは最後まで反ユダヤ主義と闘うワンマン政党であった。

1891年の選挙では、ハブスブルク帝国からの離脱をめざす青年チェコ党が老年チェコ党から議席の70パーセントを奪い、ターフェ内閣の与党による過半数支配が崩壊する。かたやドイツ自由派の方は、なお114議席を確保していた。そのためターフェは、かつて政権を離脱した連合左派を味方に引き入れ、政権の延命をはかったが、1893年10月10日ターフェの用意した選挙法改正案が保守派と連合左派の反対にあい、ターフェ政権はついに崩壊する。次いで誕生したのが、連合左派を主軸とするヴィンディッシュグレーツの連立内閣である。こうしてウィーンのユダヤ人の念願かなって、ドイツ自由派が再び政権に返り咲いた。

ユダヤ人はドイツ自由派が政権の外におかれていたあいだも、彼らに忠実であり続けた。彼らが政権に返り咲いたいま、彼らを支えてきたユダヤ人選挙民が、自分たちのために何かしてくれと要求して何が不当であろうか。しかし1895年2月の「オーストリア・イスラエル同盟」の大会でマイアーは、反ユダヤ主義に対する政府の無策に抗議せざるをえなかった。街頭での反ユダヤ主義の横行が政府によって黙認という公認を与えられているかぎり、反ユダヤ主義はやまず、ユダヤ人側のいかなる自己防衛努力もむなしいからである⁽²¹⁾。大会の席上マイアーは、反ユダヤ主義との闘いが、議会の中では

既成政党を頼りにしなければならないかぎりでは、自由主義政党に見切りをつけ、自分も含めてユダヤ人ブルジョアジーが社会主義に警戒心を持っていることを十分承知の上で、社会民主党に期待をかけるかのごとく発言をする。

「われわれは、どのような状況の下でも、どのような危険を冒してでもリベラルな見地を堅持しようとするなら、この、明らかに大幅な後退をとげた政党〔ドイツ自由派〕ともはやともに歩むことはできません。(それではどこへ?の叫び声)〔引用、中略〕この政党がリベラルな政党であることをやめたことが明らかとなったあかつきには、いまいる進歩的な思想の持ち主たちが集まり、すでに様々な形で見出される人材が集まり、新しい、真に進歩的な政党が形成されるということも起こりえましょう。この政党は、もちろんもはやドイツ自由派ではありません。それは国民的な政党、すなわち新しい革袋にもられた新しい葡萄酒を持つ政党であることでしょう。それは、どちらかといえば社会自由主義的な政党であるでしょう。このことは、われわれの多くにとってあまり好ましいことではないかもしれませんが。おそらく私にとってもそうかもしれませんが。しかしわれわれは、これに尻込みすべきでしょうか? そうすることが許されるでしょうか?」¹⁰⁰

1897年の3月に行なわれたオーストリア帝国議会選挙では、ドイツ自由派は114議席から77議席に激減し、かわって反ユダヤ主義を掲げるドイツ民族派が21から47議席に、キリスト教社会党が10から30議席に議席数を増やす。これに対して社会民主党も徐々に勢力を伸し、1897年の選挙では14議席を獲得した。しかし社会民主党も、ユダヤ人の指導者が少なからずいたにもかかわらず、ユダヤ人問題に対しては冷淡であった。

1899年11月14日の「同盟」の集会でマイアーは、「オーストリアのユダヤ人の状況」と題する公演を行う。そこでマイアーは、ベーメンやメーレンのユダヤ人に対し、貧富の区別なく搾取者の烙印を押す社会民主党の議員に対して、ユダヤ人にもプロレタリアートが存在することを知らないのか、と言わなければならない。

社会民主党の議員ベルナーが「ロートシルトやグートマンのことを侮辱しているだけであれば、われわれは平静にそれを我慢することもできるでしょう。しかし彼は下院で行った最近の演説の中で、まったく一般的に次のよう

に言っているのです。ユダヤ人とキリスト教徒の対立は、たんなる人種や宗教の対立ではなく、階級間の社会的対立でもあると——つまり彼に言わせれば、ユダヤ人はすべてひとつの階級に属しているのであり、彼はユダヤ人のプロレタリアートや小市民がいることを知らないのです⁽²⁰⁾。」

しかもベルナーはユダヤ人なのである。社会民主党のユダヤ人たちは、自分たちがユダヤ人であるだけにいっそう、ユダヤ人問題に深入りすることによって自分たちの党がユダヤ人の党と言われることを嫌った。他方、「同盟」に所属するユダヤ人ブルジョアたちは、当然のことながら社会主義政党に同調することはできない。自由主義陣営が反ユダヤ主義に対して無能であることが判明し、社会民主党に頼ることもできぬいま、ユダヤ人にはもはや支持できる政党はない。だがだからといって、ユダヤ人は民族主義政党を組織すべきではないだろう。結局マイアーは、「同盟」を創設したブロッホの精神に帰る。

「われわれはあらゆる政党から身を守らねばなりません！この事実から、われわれはいかなる結論を引き出すべきでしょうか。私は、結論はまったく明らかであると思います。われわれユダヤ人はこの狂気じみた民族闘争に関与せず、助長もしないということです。われわれは、われわれの敵に対する防衛に限定すべきだということです。そしてオーストリアの政治家たちの国政手腕が、ライタ川のこちら側の諸民族に理性を取り戻させ、純粋に民族的でしかない政党から純粋に政治的な政党を作り上げる方策を見出すまで、われわれはこの自己限定に徹することでありませう⁽²¹⁾。」

シオニストのアルトゥール・フロイトは、世紀末のオーストリアのユダヤ人は自分たちの厳しい現状を正しく認識できず、いや認識しようとせず、自由主義が実現したユダヤ人解放のあり方にしがみついていたと批判する。困難な問題に目をつむり、真剣に考えようとしなないのはオーストリア的メンタリティの特徴だが、フロイトによれば、オーストリア・ユダヤ人もまた、このオーストリア的メンタリティから逃れられなかった。そして未来への展望を示すことができないユダヤ人指導者にかわって、ユダヤ人に努力を傾けるべき理想を示したのがシオニズムであった、という⁽²²⁾。現状のラディカルな変革を迫るシオニズムの担い手は、何の財産も名声も持たない学生の中か

ら誕生した。

- (1) Bloch, *Erinnerungen*, S. 190.
- (2) Ebd., S. 197.
- (3) Ebd., S. 190.
- (4) *Oesterreichische Wochenschrift*, Jg. 2, Nr. 14, Wien 10. April 1885, S. 1.
- (5) Bloch, *Erinnerungen*, S. 200.
- (6) Ebd., S. 166.
- (7) Ebd., S. 165.
- (8) Adolf Jellinek, *Der jüdische Stamm. Ethnographische Studien*, Wien 1869, S. 6.
- (9) Ebd., S. 12.
- (10) Ebd., S. 47f. 1882年のイエリネクが、レオ・ピンズカーのシオニズム構想に対して聞く耳を持たなかったのは当然であろう。両者の会見については、前掲拙稿『「ハプスブルク神話」と世紀末ウィーンのユダヤ人』の214ページを見よ。
- (11) 長田浩彰氏はユダヤ人の *Stammesbewußtsein* に「系統意識」という訳語をあてられ、現在どの国家に帰属しているかという彼らの国民意識 (*Nationalbewußtsein* oder *Volksbewußtsein*) と区別されている (長田浩彰「1912年のドイツ『ユダヤ人問題』」,『西洋史学報』, 第17号, 1990年)。筆者も拙著『西欧とユダヤのはざま』(南窓社, 1992年) の126ページで、ドイツの第1世代のシオニスト、フランツ・オッペンハイマーの論説「*Stammesbewußtsein* und *Volksbewußtsein* [系統意識と国民意識]」を訳すさい、この訳語を使用させていただいた。オッペンハイマーは、ドイツの愛国者であるユダヤ人が、なぜ同時にシオニストでもありうるかという問に対して、それは、ユダヤ人が自分たちが生まれた国民国家に対する国民意識を持つとともに、それとまったく共存可能なルーツに対する系統意識を持つからであるとする。
- (12) 前掲拙稿『「ハプスブルク神話」と世紀末ウィーンのユダヤ人』を見よ。ブロッホと同時代の多くのユダヤ人にとって、ハプスブルク神話は本物であるかに思われた。

ユダヤ人全体をユダヤ人種あるいはユダヤ民族として社会から排除しようとする政治運動は、ベルリンでは、1879年秋にアードルフ・シュテッカーらを中心とするベルリン反ユダヤ主義運動として開始される。これを見た経済学者でウィーン大学教授のユダヤ人イーゾドーア・ジンガーは、「わがオーストリアには、その性格からして、反ユダヤ主義に特別の愛着を持つ大公衆などいない」と述べる (Isidor Singer, *Berlin, Wien und der Antisemitismus*, Wien 1882, S. 25)。ジン

ガーによれば、ベルリンの反ユダヤ主義運動は、ビスマルクの政府当局によって阻止されるどころか、むしろ容認されたものであった。それゆえ今後ベルリンは、ドイツ民族の「知性の中心」という名誉ある名前を失い、「反ユダヤ主義の首都 (Ebd., S. 3)」と呼ばれるのがふさわしい。ヒューマニズムと寛容を旨とする「純粋なドイツ精神はベルリンを追われた。それは、シュプレー川の岸辺から青く美しきドナウの岸辺へと避難してきたのだ (Ebd., S. 8)。」われわれ真のオーストリア人は、異なる民族に属し、異なる宗教や宗派を信じる人々が平和的に共生することを望んでいる。ジンガーによれば、いまウィーンのみが、真のドイツ精神の中心地として残ったのである。

ジンガーのようなユダヤ人が、オーストリアでは、特殊プロイセン・ドイツ的な産物である反ユダヤ主義に対して民衆の支持がないとしたのも、それなりの理由がある。実際シェーネラーは、その大ドイツ主義のゆえに、大衆の心をつかむことはできなかった。シェーネラーは多民族国家であるハプスブルク帝国を解体し、ドイツ・オーストリアとビスマルクのドイツとの統一を説く。そして多民族を超越しつつ、それを統合するものとしてのカトリシズムと皇室の権威を否認し、さらに帝国のいたるところに偏在する超民族としてのユダヤ人を攻撃した。しかし反ユダヤ主義的言動こそ一部の民衆にうけたものの、民衆は皇室に愛着をよせており、カトリック教会の権威にはあくまでも忠実だったからである。

しかし現実にはジンガーの思い入れにもかかわらず、オーストリアでも、ベルリン反ユダヤ主義運動のカトリック版ともいえる反ユダヤ文書には事欠かなかった。雑誌『カトリック国民のための警声』に掲載された「ユダヤ人問題」(Die Judenfrage, in : *Weckstimmen für das katholische Volk*, Jg. XII, Heft 9, Wien 1881)あるいは「ユダヤ人問題の解決のために」(Zur Lösung der Judenfrage, in : *Weckstimmen für das katholische Volk*, Jg. XII, Heft 10, Wien 1881)と題された論文は、現在のヨーロッパの経済、社会、文化のあらゆる領域でユダヤ人勢力の増大を招いた原因は、彼らを解放し、世俗の富のあくなき追求を許した政治的・経済的自由主義であるとする。筆者によれば自由主義とは、「宗教的自由思想〔無神論〕の諸原則を政治的、経済的、宗教的組織へとまとめあげたもの (Heft 10, S. 8.)」に他ならないが、その無神論を生み出したのは、16世紀の宗教改革に始まるローマ・カトリック教会からの離反であった。それゆえユダヤ人問題の根本的な解決は、キリスト教による自由主義の克服と、キリスト教国家の建設以外にはない。しかしこの解決法には時間を要する。それゆえ筆者は、とりあえず現在の経済的、社会的制度の枠内でユダヤ人の悪しき影響力をできるかぎり削ぐよう、社会のあらゆる領域からユダヤ人を締め出すことを提案する。

- (13)『民族対立とオーストリアのユダヤ人』は、ターフェの民族有和政策を推進する出版物として、ターフェから印刷費の援助を得た。

- (14) *Festschrift zur Feier des 25 jährigen Jubiläum der "Oesterreichisch-*

Israelitischen Union", Wien 1910, S. 8.

(15) Bloch, *Erinnerungen*, S.198.

(16) Ebd., S. 201.

(17) Siegmund Mayer, *Ein jüdischer Kaufmann 1831 bis 1911*, Leipzig 1911, S. 289.

(18) Julius Zuns, *Denkschrift über die antisemitische Bewegung in Oesterreich*, Frankfurt a. M. 1891, S. 11.

(19) Ebd., S. 15.

(20) Ebd., S. 40.

(21) *Mittheilungen der Oesterreichisch-Israelitischen Union*, Jg. 7, Nr.69, März 1895, S. 12f.

(22) Ebd., S. 16.

(23) *Mittheilungen der Oesterreichisch-Israelitischen Union*, Jg. 12, Nr. 115, Jänner 1900, S. 9.

(24) Ebd., S. 4.

(25) Arthur Freud, Um Gemeinde und Organisation. Zur Haltung der Juden in Österreich, in :*Bulletin des Leo Baeck Instituts*, Jg. 3, Nr. 10 (1960), S. 81f.

(3) シオニズムという妖怪

「1880年秋、20歳の青年モーリツ・T・シュニラーは、医学を学ぶため、ブカレストからウィーンにやってきた。幼少の頃から彼はユダヤ人であることを誇りに思い、ユダヤ人に対するルーマニア人の粗野な憎しみの爆発に深い怒りを感じていた。彼は生まれた町に背を向け、ウィーンの文化的に洗練された環境の中で魂の傷を忘れ、同じ心を持つ友人を見つけることができるように望んだ。ところがここウィーンで、はじめて本当の孤独感が彼を襲ったのである。彼は、ウィーンのユダヤ人や多くのユダヤ人学生の品位のないけばけばしさに深い恥らいを覚えた。彼は、自由主義や自由という隠れ蓑の下で、ここに蔓延っているものは魂の奴隷化、自己の抹殺へと進むにちがいない自己否認以外の何ものでもないことを知った⁽¹⁾。」

カディーマは、シュニラーのように東欧のユダヤ人町から憧れのウィーンに出てきたものの、ウィーンのユダヤ人社会になじめず、疎外感に悩むユダヤ人学生たちの中から誕生した。ハプスブルク帝国の東部辺境に目を転じれ

ば、1880年当時のガリツィアには約70万人、ブコヴィナには約7万人近いユダヤ人が生活し、人口の7割、8割をユダヤ人が占めるシュテットル（ユダヤ人集落）がいくつも存在する。彼らの多くがイディッシュ語を母語としていた。現に1909年のブコヴィナでは、イディッシュ語がユダヤ人の民族語と認められるよう要求して、訴訟まで起こされたのである⁽²⁾。ガリツィアやブコヴィナのユダヤ人は、宗教や言語を異にするポーランド人やルテニア人と隣り合い、ユダヤ人であることに疑問を持つことなく生活した。そのユダヤ的世界から出てきた彼らが、ウィーンでなおユダヤ的ユダヤ人であり続けようとする時、彼らの誇りは同胞と信じるユダヤ人たちによって傷つけられる。なぜならウィーンで成功したユダヤ人とは、ユダヤという出自に負わされた賤民性を消し去るためにあらゆる努力をかけたわけ、ウィーンの洗練されたドイツ文化を吸収し、そのようにして経済的、社会的上昇を手に入れた人々だからである。彼らにとって、ガリツィア・ユダヤ人学生がイディッシュ語訛のドイツ語は滑稽でもあり、しかしまた自分や、あるいは自分の親たちも、かつてガリツィアから出てきた成り上りのウィーン文化人であることを思い出させるという意味では、いやでたまらないものでもあった。しかしシュニラーは、このようなウィーンのユダヤ人を手本として成り上がることに「自己否認」を感じたのである。

シュニラーと、ガリツィア出身の医学生ルーベン・ビーラー、ウィーン生まれではあるが東欧出身の両親を持つ法学部生のナートン・ビルンバウム⁽³⁾の3人が出会ったことにより、カディーマは誕生する。カディーマの精神的指導者にして名付け親となったのは、ヘブライ語の作家ベレツ・スモレンスキ⁽⁴⁾である。ビルンバウムは、後にイディッシュ文化運動の推進者として名を知られる。

カディーマはオーストリアで最初のユダヤ民族主義学生団体となるが、1883年3月23日に当局の認可をえた規約は、「オーストリア・イスラエル同盟」の規約と似てごく穏健なものであった。そこでは当局の手前、ユダヤ民族主義を疑わせるような表現は避けられ、カディーマの目的は「いかなる政治性も排除し、ユダヤの文学および学問を育成すること」とされる。しかし実際にカディーマに入会しようとする者には、文書で次の3点に同意することが

求められた。1. 同化に反対して闘うこと、2. ユダヤ民族への帰属を宣言すること、3. ユダヤ人の郷土設立の手段として、パレスティナ植民を促進すること⁽⁵⁾。カディーマのモデルとなったのは、レオ・ピンスカーの『自力解放』に共鳴して誕生したロシアのシオニズム学生組織である。しかし創設期のカディーマのユダヤ民族主義は、まだ実践性をともなわない倫理的民族主義であり、ブロッホの「同盟」が訴えるユダヤ人意識との相違もはっきりしていなかった。カディーマの掲げるユダヤ的アイデンティティの再生という理念に共感したブロッホは、カディーマの設立を祝福し、1884年にカディーマが主催したマカベア祭にも出席してスピーチを行っている⁽⁶⁾。

カディーマが東欧出身のユダヤ人学生たちの目立たぬ団体から、ウィーン出身の学生の参加も得て、戦闘的なユダヤ民族主義学生団体へと変貌するのは1880年代末のことである。当時大学構内で、ドイツ民族主義学生によるユダヤ人学生への暴行や侮辱が過激化するのに対抗して、ユダヤ人学生の側も黙っていないで、両者のあいだで決闘が繰り返された。しかしカディーマはなおウィーンのユダヤ人の目には、ユダヤ民族主義団体というより、無害で無邪気な学生団体に見えた。

「ヘルツル以前のカディーマの活動は、ユダヤ市民たちからそれほどじめに受けとめられていなかった。人々は、われわれを冗談の種にした。時々われわれが騒ぎすぎると人々は憤慨したが、それでも人々はわれわれのことを楽しんでた。ケーキと生クリームを前にしての集まりで、「われらのカディーマの団員たちが、今週またどんなふうに関戦したかお聞きになりましたか」などと言うことができるとは、なんとすてきなことだろう。それはまったくユダヤ的ではなく、逆にきわめて騎士的なことであった。全体としてわれわれは、無害な馬鹿者と見られていた。この学生たちも年をとるだろうし、そうすればもっと利口にもなるだろうと言われていた⁽⁷⁾。」

カフェハウスの話題としては、ローリングとブロッホのタルムード論争より、騎士的に闘われる決闘の方がよほどスマートであろう。カール・E・ショースキーが『世紀末ウィーン』で指摘しているように、かつて学生時代のテオドーア・ヘルツルもまた、この騎士の世界に憧れたのである。しかしヘルツルが『ユダヤ人国家』をたずさえ、シオニズム運動のカリスマ的指導者とし

てウィーンに現れたことにより、状況は変わった。カディーマは、ヘルツルの活動を支援する組織となる。

ヘルツルに始まる政治的シオニズム運動において、第1目標はユダヤ人国家の再建である。この第1目標との関わりで、現在の居住国でのシオニストの活動はいかに行われるべきか。シオニストの現在の居住国での活動は「国内政策 Landespolitik」あるいは「現時点での活動 Gegenwartsarbeit」などと呼ばれたが、これについては、まったく無関心な態度から、文化活動をつうじたユダヤ民族意識の覚醒といった穏健なもの、現在の居住地でユダヤ人の民族的権利を要求する政治活動の必要を主張するものまで、見解はさまざまにわかれる。

ヘルツルの創設した世界シオニスト機構が、居住国の国内政治への介入に消極的であったのに対し、ガリツィアやブコヴィナでユダヤ人問題をかかえるオーストリアのシオニストにとって、現時点で解決すべき問題は山のようにあった。1901年3月24/25日にオルミュツで開催された第1回オーストリア・シオニスト会議で、ベルトルト・ファイヴェルは、シオニストの公式の綱領を批判して述べる。綱領には、パレスティナでのユダヤ人の郷土建設のためのプログラムはあるが、現在の居住国で困窮し、反ユダヤ主義にさらされているユダヤ人の問題に具体的にどう対処すべきか、現時点での活動についてのプログラムが欠けているのではないかと。ファイヴェルの主張は多数の賛成を得て、この会議で採択されたオーストリア・シオニストの綱領の重点は、現時点での活動におかれる。さしあたりその内容は、ユダヤ人の経済的地位を向上させるため、職業訓練や職業の斡旋を行う諸組織の創設、また文化的、教育的活動を行う諸組織の創設であった⁽⁸⁾。

オーストリア・シオニストの国内政策重視の姿勢は、1907年のオーストリア最初の男子普通選挙を前に、より鮮明になる。すでにヘルツル亡き1905年12月3日、ウィーンで開催された全オーストリアのシオニストの会合で、以下のことが決定された。すなわちシオニストとしてオーストリアの選挙制度改革論議に参加すること、そのさい「ユダヤ人クーリエ [梓]」の設置を要求し、ユダヤ人の民族的利害を代表する議員を割り当てられた数だけ議会に送り込むことができるようにすることである。しかし憲法でユダヤ民族の存

在が認められていないオーストリアの現状では、ユダヤ人クーリエの要求は非現実的であった。そこで1906年7月1日にクラカウで開催されたオーストリア・シオニスト臨時会議では、シオニストによって構成される「ユダヤ民族党」を創設し、来るべき選挙戦を闘うことが決定された⁽⁹⁾。

「ユダヤ民族党」は、その政治綱領の第1条でユダヤ人が民族であること、第2条で、シオニズム運動において、パレスティナ建設の推進と現在の居住国での国内政策の追求とは矛盾対立するものではないことを確認する。その上でオーストリアにおける「ユダヤ民族党」の要求とは、多民族国家オーストリアを民族的領域に分割するのではなく、民族自治を民主的な地方自治の基盤の上で実現すること、そのようにして領域的まとまりをもたないオーストリアのユダヤ人にも民族自治が認められることであった⁽¹⁰⁾。

この政党が、その理念をフィッシュホーフの地方自治論と民族自治論に求めていることは、同じくフィッシュホーフを師と仰いだブロッホにとって、皮肉な星の巡り合わせである。ブロッホのシオニズムに対する態度は、はじめは好意的であった。1880年代のブロッホは、カディーマの団員からはユダヤ民族運動の指導者の1人とみなされており、1896年にヘルツルが『ユダヤ人国家』を世に問うた時も、ブロッホはヘルツルの活動を励ます。しかしヘルツルについていえば、シオニズムに対するラビ、ブロッホの宗教的、人道的関心と、もともとユダヤ教にもユダヤ文化にも関心のなかったヘルツルの政治的シオニズムのあいだには、はじめから相いれないものがあったはずである。ブロッホにとって、たとえばモンテフィオールらの人道的援助によって進められるユダヤ人のパレスティナ入植は罪のないものであったが、ユダヤ人が大挙してパレスティナに帰り、そこで人為的に世俗国家を建設することは、ユダヤ教では禁じられていることである。パレスティナ問題はさておくとしても、ヘルツルの死後、オーストリアのシオニストが国内政策に乗り出すにいたって、ブロッホとシオニストとの見解の相違は明らかにならざるをえない。

シオニストの動きを牽制して「オーストリア・イスラエル同盟」は、ユダヤ人クーリエを作ることは「バーリア・クーリエ」を作ることに等しく、ユダヤ人を団体として差別したがつている反ユダヤ主義者を喜ばせるだけだと

する。彼らが懸念したのは、ユダヤ人クーリエの設置が、経済活動や弁護士、医師などの専門職で、ユダヤ人比率の導入やユダヤ人排除につながることであった。それゆえ1907年の選挙を前に推薦候補者を決定する同年5月4日の大会で、「同盟」は、シオニストのユダヤ人クーリエの要求やユダヤ民族承認の要求を否認する。「なぜならわれわれは、どのようにであれユダヤ人を民族的に区別することは、われわれの信徒同胞 Glaubensgenossen の、とりわけ混合言語地域の信徒同胞の経済的生活条件にとって深刻な危険となると考えるからである⁽¹⁾。」

それでは「同盟」は、この選挙にどのようにのぞむのか。

ウィーンでユダヤ人有権者が多数を占めるのは、市内区のカイ地区を含む第1選挙区と、レオポルトシュタットを含む第5選挙区である。ユダヤ人有権者が多数といっても、両選挙区とも、ユダヤ人は候補者を1人に絞った場合にのみ議席を獲得することが可能であった。シオニスト陣営では、オーストリア全体の24の選挙区で候補者をたて、その21はガリツィアであったが、ウィーンでも、すでに第5選挙区でイージドーア・シャリートを候補者に出していた。しかし「同盟」としては、シャリートを推すことはできない。「同盟」のユダヤ人たちは、自由主義の勝利を信じて疑わなかった旧世代のユダヤ人とは異なり、もはやユダヤ人問題は公式には存在しないとか、抗議の声をあげなくとも反ユダヤ主義は自然に消滅する、など考えるほど楽観的ではなかった。キリスト教社会党のような反ユダヤ主義政党が台頭を見せている現在、彼らにしても、反ユダヤ主義と積極的に闘う候補者が望ましいにはちがいない。問題は闘い方である。彼らは、シオニストとは一線を画する必要があった。民族主義に民族主義をもって対抗することは、「同盟」の信条に反するのではないか。

ユダヤ民族主義を掲げるシオニストの登場は、「同盟」のユダヤ人に、みずからのユダヤ人意識とは何であるのか、あらためて反省を迫ることになった。これについてこの時期の「同盟」のユダヤ人は、ほぼ3つのグループわかれていたとみてよい。シオニストのユダヤ民族主義にどちらかといえば共感する少数グループと、反対に、シオニストに対してきわめて警戒的なグループ、さらにその中間に位置するグループである。このうち中間グループの中

でも、ユダヤ人意識をより前面に出そうとするジークムント・フライシャーらは、ユダヤ民族主義者とは一線を画しつつも積極的にユダヤ人のために闘う候補者として、第1選挙区では、もと「同盟」の会長で、「権利保護・防衛事務局⁽¹²⁾」の創設者の1人でもあったヴィルヘルム・アニングーを推薦、第5選挙区ではブロッホを推薦する。1895年にポーランド・クラブの圧力で議員を辞職させられたブロッホ自身は、やる気満々であった。しかしブロッホ推薦に対しては、ゲマインデの主だったメンバーから不賛成の声があがり⁽¹³⁾、また決選投票に持ち込まれた時、ブロッホでは社会民主主義者の支持が期待できないため、ブロッホは推薦からはずされる。代わりに推薦を受けたのは、その言動においてブロッホより穏健なゲマインデの副会長グスタフ・コーンである。しかしすでに第5選挙区では、シオニストのシャリート、オールド・リベラリストのフェルディナント・クレビンダー、社会政策家のユーリウス・オフナーという3人のユダヤ人候補がたっていた。これにコーンが加われば4人のユダヤ人候補のあいだで票が割れ、結局誰も当選できない可能性があった。漁夫の利を得るのはキリスト教社会党の候補者であろう。

おそらくここで調整の手腕を発揮したのが、当時「同盟」の会長職にあったマイアー⁽¹⁴⁾である。彼は、とくにユダヤ人のための候補者というわけではないが、反ユダヤ主義に対しては一般的人権問題として力強く闘ってくれる候補者として、4人のうち、コーンではなくドイツ進歩派のオフナーを選択したのである。そして1907年5月4日の「同盟」の大会までに、「同盟」の多数派はオフナー推薦の方向で固まった。さらに第1選挙区でも、選挙民に人気がなく、また選挙前に病気になったアニングーがおり、1848年革命に参加した自由主義者イグナツ・クーラングの息子で、オフナーと同じくドイツ進歩派に属するカミロ・クーラングの名があがった。5月4日の大会で「同盟」の執行部は、われわれにとって望ましい候補とは、「みずからの自由で、また同時にユダヤ的感情のゆえに、われわれ信徒同胞の国民的権利のために力強く闘ってくれる人⁽¹⁵⁾」であるとし、2人に対する推薦の承認を求めた。

しかし、かつてのドイツ自由派の流れをくむドイツ進歩派のオフナーやクーラングのようなユダヤ人を持ち上げることは、「同盟」創設のさいの精神か

らの後退ではないのか。執行部による活動報告の後に始まった議論で、執行部の「われわれ信徒同胞の国民的権利」というものの言い方にクレームがついた。発言に立ったリフチスは、「同盟」の執行部がユダヤ民族の承認を否認した点を批判する。さらに大会議長のミンツに向かってリフチスは、ミンツがかつてはヘルツルの協力者であり、シオニスト学生団体に向かってはまさしく反対のことを説いていたにもかかわらず、いまではこのようなものの言い方を速やかに受け入れ、「同盟」の執行部に座しているとは何事か、と述べたのである。リフチツが発言を続けるあいだに会場は騒然となった。その中でブロッホが「コーンの追従者は会場を去れ」と叫ぶ。これに応じて約20名の参加者が会場を去った⁽¹⁶⁾。ここでのコーンとは、「同盟」の創立メンバーの1人でカディーマの会員でもあったヤーコブ・コーンのことであろう。彼は初期のシオニズムの国内政策において重要な役割を果たす。

リフチツの発言が個人攻撃におよんだため、議長はリフチツの発言を停止させ、次いでみずからの立場を次のように弁明する。それはカディーマやヘルツルに共感を寄せたブロッホ自身の弁明と聞くこともできる。ミンツの弁明を要約すれば次のようであった。

たしかに自分はヘルツルの協力者であり、第1回シオニスト会議のパーゼル・プログラムの起草委員の1人であった。しかし当時のシオニズムの関心は、「同化できない、あるいは同化することを望まないユダヤ人のために郷土を獲得すること」に集中しており、「ヘルツルとその追従者たちは、ユダヤ民族主義的国内政策を行うことはしなかった。」シオニストたちは、現在の居住国の反ユダヤ主義の問題に無関心なばかりでなく、反ユダヤ主義はシオニズムの宣伝の手段になると、その味方をする始末であった。この国内政策に関する見解の相違が、自分がヘルツルから離れることになった理由である。6年間のあいだ、私はいっさいのシオニズム活動から遠ざかっていた。そうこうするうち、ヘルツルの死後に起こったのがオーストリアのシオニストの方向転換である。「シオニスト党の指導者たちは、選挙制度改革をユダヤ民族主義的国内政策を導入するための合図と見なした。彼らはユダヤ人のための選挙枠の設置を、すなわちユダヤ人クーリエの設置を求めた。私もこの運動に参加するよう要請されたが、私は断った。その数週間後に、私は

「同盟」の理事に選出されたのである⁽¹⁷⁾。」

そしてミンツは、自分の過去および現在の見解と、「同盟」の理事としての立場はまったく矛盾しないとして述べる。

「完全なる同権獲得のための「同盟」の闘いは、正しく理解されたシオニズムの考え方とまったく矛盾するものではないということ、これが私の過去および現在の見解です。これに対して私が昔も今も忌み嫌うところのものは、正真正銘の「シオニスト」として、あるいは「ユダヤ民主主義政党」として姿を現した分派の、オーストリアやウィーンでユダヤ民族主義政治を行おうというもくろみなのです⁽¹⁸⁾。」

つまりミンツによれば、ユダヤ人にとって居住国での国内政策は必要だが、今のシオニストのそれはやり方が間違っており、彼の考える正しいシオニズムからの逸脱だというのである。それではミンツは、正しいシオニズムによる居住国でのユダヤ人政策をどのように考えているのか。どうもはっきりしないのだが、ミンツの発言に対しては、盛んな賛同の拍手が寄せられた。それというのもミンツの発言は、ヘルツル登場当時にはシオニズムに共鳴したものの、今のシオニストには、もはやついてゆけないと考える「同盟」の会員たちの気持ちを代弁するものだったからであろう。

一連の議論のあと会長マイヤーは、クーラングとオフナー推薦の辞を述べた。

「われわれは、たんにユダヤ人なのではありません。われわれは、まず第一によき国民です。実際私は、われわれオーストリアのユダヤ人こそ、とりわけ最良のオーストリア人であると信じています。なぜならスラヴ人であれ、ドイツ人であれ、諸民族はもっぱら民族的なオーストリアを望み、教権主義者は教権的なオーストリアを、封建主義者は封建的なオーストリアを、社会主義者はもっぱら社会主義的なオーストリアを望んでいるのに対し、われわれユダヤ人は、限定詞抜きオーストリアを望んでいるからです。そうすとも、われわれはオーストリアを、祖国を望んでいます。しかしそれは継母のような祖国であってはなりません。われわれは、平等な国民であることを望みます。ところがまさしくこの平等な国民であるということこそ、われわれの敵によって激しく攻撃されているのです。それゆえ私はこう叫びたい。

この点で、すなわちわれわれの国民的権利をめぐる闘いにおいて、われわれにはいかなる動揺も、いささかの譲歩も、わずかの妥協もありえないと⁽¹⁹⁾。」

マイアーは、この点についてクーランダはマイアーの見解に完全に同意していると述べ、さらにオフナーについては、社会正義のために闘う人であることが強調される。

「オフナー博士は、ユダヤ人の権利の味方というよりは、不正義の加えられたあらゆる社会階層の味方です。そうであるなら、オフナー氏がわれわれの側についてくれることは、われわれにとっていっそう効果的といえるでしょう。なぜならオフナー氏は、特殊ユダヤ人の代表ではなく、それ以上のものだからであり、そのことによってオフナー氏は、他の抑圧された社会階層の利害とわれわれの利害とを結びつけてくれるからです⁽²⁰⁾。」

この大会でブロッホは、「同盟」の執行部がオフナー推薦を決めたさい、手続き上の不正があったのではないかと異議を唱えたが、それ以上つまらない発言はしていない。大会では「同盟」の推薦候補者について、ほぼ全会一致で執行部案が承認された。

マイアーの情勢判断が、ウィーンの「同盟」の多数者の賛成を得たのもっともである。彼らとしては、反ユダヤ主義を綱領に掲げるキリスト教社会党やドイツ民族派の候補者、あるいはチェコ人やポーランド人の民族主義政党の候補者に投票できないのはもちろんであったが、私有財産の否定を唱える社会主義政党も彼らの望むところではない。かといってシオニストの「ユダヤ民族党」もまた論外であるとすれば、彼らが唯一支持できるのは、ドイツ自由派の中の進歩派ユダヤ人議員ということになる。彼らであれば、非ユダヤ人自由主義者たちの票を集めることも可能である。これによって「同盟」は、シオニストからドイツ同化主義者として厳しく批判されるのだが、かつてウィーンのユダヤ人とドイツ自由派の癒着を批判し、「同盟」を旗揚げしたブロッホの心境は複雑であっただろう。シオニストの出現に押しもどされるようにブロッホは、「同盟」創設当時の積極性を穏健化させていたが、そのブロッホでさえ、「同盟」の中での影響力の低下は否みがたいものがあった⁽²¹⁾。

選挙ではクーランダとオフナーの2人が当選をはたす。彼らを「同化主義

者」として激しく攻撃したシオニストのシャリートは、第1回投票で5.6パーセントの票しかえられず、オフナーの25パーセントに大きな差をつけられた。オフナーは、とくにユダヤ人問題に関心のある候補者というわけではなかったが、社会活動家としてレオポルトシュタットでは圧倒的な人気があったのである。

ただ社会活動についていうなら、ウィーンのシオニストたちが、早くからユダヤ人貧困層の啓発運動に着目した点は評価されねばならないだろう。後にヘルツル著作集の編者となるレオン・ケルナーは、1900年12月2日、ウィーンのシオニスト機関と協力して、ユダヤ人貧困層が集中して住む第20区のブリグッテナウに「ユダヤ・トインビーホール」を開設する。その目的は、従来の慈善施設のように貧しいユダヤ人に施しを与えることではない。150人程度の人数を収容できるホールにピアノや貸し文庫を備えたトインビーホールは、講演会やディスカッション、また成人のための語学その他の学習コースや、音楽の夕べなどの開催をつうじて、貧しいユダヤ人たちに交流と文化的啓発の機会を提供しようとするものである。聴衆のほぼ半数は、未婚や既婚の女性であり、男性の聴衆の多くは、店員や手工業職人、あるいは行商人や下男と呼ばれるような人々であった⁽⁹²⁾。

トインビーホールの夕べは、厳しい生活を送るこれらの人々に「大都會でのつらい孤独を忘れさせ、この世で自分たちはひとりぼっちではないのだという気持ちにさせるような」時間を提供した⁽⁹³⁾。また1日中ドイツ人を相手に仕事をしなければならない環境で、「ユダヤ的世界に郷愁を覚えた者は誰でもそこに行き、自分本来の世界の中で時を過ごすことができた⁽⁹⁴⁾。」後にイディッシュ語で「ウィーンのイディッシュ文学とジャーナリズム」を著したイディッシュ語主義者のメンデル・ノイグレッシュエルによれば、トインビーホールでは、人々はユダヤ人仲間のあいだで、故郷にいるような仕方では時を過ごすことができた。そこは、ガリツィアから出てきたばかりのユダヤ人のイディッシュ語も馬鹿にされることのない、ウィーンでは数少ない場所のひとつだったのである。トインビーホールではイディッシュ語の民衆音楽のコンサートが催され、1905年からはイディッシュ語での講演会も行われた⁽⁹⁵⁾。トインビーホールで行われた講演会の演題は、自然科学や文学、歴

史など多方面にわたり⁽²⁶⁾、トインビーホールの活動は非党派的なものとされたが、ノイグレッツェルによれば、そこで行われた文化的な仕事は一貫してユダヤ民族主義色の濃いものであったという。

オーストリア全体で見れば、1907年の選挙でガリツィアから3人、ブコヴィナから1人、計4人の「ユダヤ民族党」の議員が当選した。これによつてはじめて、帝国議会内にユダヤ人クラブをつくることが可能となる⁽²⁷⁾。しかし1911年の選挙では、これら4人の議員のうち、再選されたのは1人であった。ウィーンでは、シオニズムの国内政策の旗手ローベルト・シュトリッカーが再びオフナーに敗北する。

第1次世界大戦以前のオーストリアのシオニストは、人数においても、組織力においてもきわめて脆弱であった。1911年の選挙で完敗した後、シュトリッカーはユダヤ民族主義思想の普及のため、レオポルトシュタットに「ユダヤ民衆協会」を設立するが、戦前のウィーンのシオニストの活動もまた、その範囲も影響力もごくかぎられたものであり、たとえばトインビーホールの活動を助けたのは、カディーマに集まったような貧しい学生たちである。ウィーンで世界シオニスト機構にシュッケルを納める者の数は、1899年で762人、1902年で872人にすぎない⁽²⁸⁾。

とはいえシオニストの登場は、とくにその国内政策が明らかになるにつれて、ウィーンのユダヤ人に警戒心を起こさせた。1889年のゲマインデ選挙で、1882年のヘルツカの新聞の一件以来ブロッホの宿敵であったエマーヌエル・バウムガルテンが敗北し、「同盟」が推薦する候補者が当選したことにより、ブロッホおよび「同盟」とゲマインデの関係は好転する。「同盟」の会員たちは、ウィーンのゲマインデの新エスタブリッシュメントへのし上がっていった。第2章の第2節で述べるように、ゲマインデの理事を選出する選挙権は、ゲマインデ税を支払う能力を持つ、数の上ではウィーンのユダヤ人口の10パーセントにも満たないユダヤ人男性にかぎられていたが、1905年当時で、ウィーンの「同盟」の会員約2500人のほとんどがゲマインデ選挙の有権者であった。第2章第2節の表で示すように、1906年のゲマインデ選挙での有効投票数が4416票であったことを考えれば、2500人がまとまった時の影響力はかなりのものだったはずである。これら「同盟」のユダヤ人はしかし、

金持ちがゲマインデを牛耳る旧来の体制に革新をもたらすことはなかった。それどころかシオニストの登場は、「同盟」のユダヤ人を保守派へと変えてしまう。1900年のゲマインデ選挙以来、毎回独自の候補者リストをたて、ゲマインデの乗っ取りをめざすシオニストに恐れをなし、逆にゲマインデは、金持ちの有権者により有利なように選挙制度を改変してしまうのである。ゲマインデの選挙制度の民主化は、第1次世界大戦以前にはついに行われることはなかった。

国内政策を重視するウィーンのシオニストたちは、ゲマインデを「信徒ゲマインデ」から「民族ゲマインデ Volksgemeinde」に変革することをめざす。それでもヘルツルの初期の同行者たちは、ゲマインデとの関係においてまだ穏健であった。その1人であるオスカー・マルモレクは、一気にゲマインデを乗っ取るのではなく、シオニストが既存のゲマインデの組織に入り込むことにより、ゲマインデを内側から改革してゆく道もありうると考える。それゆえ1904年のゲマインデ選挙では、ゲマインデが用意した統一候補者リストに名を連ねたが、彼の妥協的な態度は若きシオニストから激しく批判された。その容赦のなさには1908年8月のマルモレク宛ての手紙で、同志のマックス・ノルダウに次のように言わせる。

「この子たちは、キリスト教社会党的な雰囲気の中で育ったのです。そしてユダヤ人のやり方にはよく見られるように、彼らは反ユダヤ主義者の技巧や方法のすべてを採用してしまったのです。これはちょうどわがロシアの兄弟の多くが、黒百人組のやり方を採用したのと同じことです⁽⁹⁾。」

マルモレクは翌1909年に自殺した。

実際ポスト・リベラリズム時代のラディカリズムを身につけたアードルフ・ベームやシャリートら若きシオニストたちは、自分たちの要求を実現しようとする手段において、きわめて攻撃的であった。シオニストによるゲマインデの指導者批判の激しさは、反ユダヤ主義者のそれに匹敵し、かえって反ユダヤ主義者が、シオニストのゲマインデに対する侮辱的言動を模倣するといった事態さえ発生した。シオニストのユダヤ教に対する態度もさまざまであった。ヘルツル自身もユダヤ教とは無関係な環境で育ったが、シオニストの一部は、ユダヤ人はユダヤ教徒ではなく、ユダヤ民族と規定されるべきだと考

え、ユダヤ教にことさら無関心な態度をとる。彼らは、ユダヤ教の安息日にあたる土曜日に集会を開催することを何とも思わず、このことがゲマインデの宗教指導者やガリツィアから来た信心深いユダヤ人たちを激怒させた⁽³⁰⁾。

しかしゲマインデ選挙でシオニストの候補者リストが最も票を集めた1906年でさえ、シオニストは当選者を出すことができず、1906年以後は得票数を減らす。1912年に、シオニストによるユダヤ人社会の分裂を避けたいゲマインデの指導部と、何としてもゲマインデの中枢に入り込みたいシオニストとのあいだで妥協が成立した。この年ヤーコブ・エールリヒとシュトリッカーの2人のシオニストが、ゲマインデで理事の席を獲得することに成功する。このシュトリッカーが、やがてゲマインデをわがものとするであろう。

- (1) *Festschrift zur Feier des 100. Semesters der akademischen Verbindung Kadimah*, Mödling(1933), S. 15.
- (2) 前掲拙稿「第1次世界大戦後オーストリアにおけるガリツィア・ユダヤ人の国籍問題」, 46ページを見よ。
- (3) ビルンバウムは、はじめヘルツルの政治的シオニズムに協力するが、後に離反し、東欧のイディッシュ語ユダヤ人を担い手とするディアスポラ民族主義を唱えた。第1次世界大戦後は正統派ユダヤ教に傾斜していった。
- (4) ヘブライ語の作家であったスモレンスキンは、1866年ウィーンで『ハシャハル [曙光]』を創刊し、ヘブライ文学およびユダヤ民族主義思想の発展に画期的な役割をはたした。ヘブライ語の「カディーマ」には、「東方へ」と「前進」という2つの意味が含まれている。団体名に「カディーマ」を採用するにあたり、「東方へ」には、西欧への同化に反対して民族の文化に回帰すること、「前進」には、正統派に反対して進歩をめざす、という思いがこめられていた。 *Festschrift*, S. 35.
- (5) *Festschrift*, S. 17. 1887年の規約改正で、ようやくカディーマの目的は「ユダヤ人学生のユダヤ人意識、民族的帰属意識の高揚」といわれる。
- (6) Ebd., S. 25.
- (7) Ebd., S. 88.
- (8) Adolf Gaisbauer, *Davidstern und Doppeladler. Zionismus und jüdischer Nationalismus in Österreich 1882-1918*, Wien/Köln/Graz 1988, S. 97f.
- (9) Ebd., S. 126f.
- (10) Ebd., S. 470f.
- (11) *Monatschrift der Oesterreichisch-Israelitischen Union*, Jg. 19. Nr. 5,

Wien, Mitte Mai 1907, S. 4.

- (12) 1897年12月15日に開設された「同盟」の機関。ユダヤ人に対する権利侵害を裁判に訴え、合法的な手段でユダヤ人の人権を守ることを目的とする。
- (13) Freud, *Um Gemeinde und Organisation*, S. 89.
- (14) 1904年より同盟の会長となったマイアーもまた、共通の土地も言語も、共通の文化さえ持たぬユダヤ人は、国家を形成する民族ではないと考えていた。それゆえシオニストのプログラムは、実現の可能性のないユートピアでしかない。いやそれどころかシオニズムは、反ユダヤ主義を激化させ、現在の居住国で市民権を守ろうとするユダヤ人の努力を台なしにするものだとする (Siehe Sigmund Mayer, *Die Wiener Juden. Kommerz, Kultur, Politik 1700-1900*, 2. Aufl. Wien/Berlin 1918, S. 467f.)。
- (15) *Monatschrift der Oesterreichisch-Israelitischen Union*, a. a. O., S. 3.
- (16) Ebd., S. 12.
- (17) Ebd., S. 13.
- (18) Ebd., S. 13.
- (19) Ebd., S. 15.
- (20) Ebd., S. 16.
- (21) Bloch, *Erinnerungen*, S. 203.
- (22) *Eine Jüdische Toynbee=Halle in Wien*, Wien 1901, S. 7f. 「トインビーホール」の名は、イギリスの経済学者で社会改良家であったアーノルド・トインビーを記念し、1884年のロンドンで開設された世界最初のセツルメントである「トインビーホール」に因んでいる。
- (23) Ebd., S. 11.
- (24) Mendel Neugröschel, *Di moderne yidishe literatur in galitsie 1904-1918*, in : *Congress for Jewish Culture* (ed.), *Fun noentn over*, Bd. 1, New York 1955, S. 374. (イディッシュ語はローマ字表記にしてある。) メンデル・ノイグレッツェル、野村真理訳／解説『イディッシュのウィーン』、松籟社、1997年、35ページ。
- (25) Ebd., S. 374. 同訳書、36ページ。
- (26) *Jahres-Bericht der Jüdischen Toynbee=Halle in Wien*, Wien 1904, S. 8f. トインビーホールの運営費は、寄付とトインビーホールの運営のために設立された「トインビーホール協会」の会員の会費によってまかなわれた。しかし資金難のため、トインビーホールの運営は1905年にシオニストの手をはなれ、ブネイ・ブリットに移る。ブネイ・ブリットは1843年にニューヨークで設立され、各国に支部を持つユダヤ人の団体で、福祉活動を中心とする。Marsha L. Rozenblit, *The Jews of Vienna 1867-1914*, Albany 1983, p. 167.
- (27) ブロッホは、彼らの民族主義にもかかわらずユダヤ人クラブの誕生を歓迎した。

- (28) Rozenblit, a. a. O., p. 168. シェッケルとは、シオニスト機構に支払う年会費のことで、オーストリアでの最低額は1クロネである。
- (29) Walter R. Weitzmann, Die Politik der jüdischen Gemeinde Wiens zwischen 1890 und 1914, in : Gerhard Botz/Ivar Oxaal/Michael Pollak (Hg.), *Eine zerstörte Kultur*, Buchloe 1990, S. 208.
- (30) Ebd., S. 209.